

総合診療科

当センターホームページ
「総合診療科のホームページへようこそ!」



■ 診療内容

● 入院

第三次医療及び各種の専門診療で構成される当センターの診療体制における当科の「総合診療」は、病院総合診療の専門科として各専門領域の診療科の枠には当てはまらない、あるいは複合化した医学的問題点のマネジメントを主たる業務としています。少ないマンパワーで多種多彩な業務を回していくために、院内の多くの診療科や部門と連携して、入院管理、コンサルテーション及び在宅移行支援を行っています。ほかの多くの診療科と同様に、0歳から15歳までの小児の医学的問題点に対して、適切な判断・対応を行っています。

入院患者さんに関しては、大きく分けて以下の五つの経路で入院管理をしています。(1) 集中治療室から退室可能となった患者さんで必要とされる入院管理の継続、(2) 当科外来に定期通院中の患者さんの状態不良への対応、(3) 救急外来に来院されたが集中治療室適応ではない患者さんの入院管理、(4) 外科系診療科で管理されている患者さんの内科的対応、及び(5) 外来通院患者さんの精査及び治療を目的とするものです。当センターでは救急外来及び集中治療室が整備されているため、当科はそれぞれの担当診療科と連携を取りながら、患者さんの入院から退院までをできるだけ円滑に進めることができるよう配慮しています。また、複数領域の医学的問題や社会的背景を持つ患者さんについては、他の診療科・部門や診療チームとの連携を積極的に取りながら、診療・ケアを行っています。

● 外来

外来は週4日の初診日を設けており、院内外からの多彩な医学的問題を扱っています。

症状や問題点が明らかに他の専門診療科領域と判断し難い患者さんに関しては、総合診療科にご紹介あるいはご相談ください(症状や経過がそれぞれの専門診療科の領域に該当する場合には、直接そちらへのご紹介をお願いいたします)。経過が複雑な患者さんや、複数の診療科にわたる患者さんの場合は、事前に地域連携・相談支援センターにご連絡をいただきますと、結果的に患者さんご家族や紹介される先生方のご負担が軽くなる場合が多くございます。どうぞよろしくお願いいたします。

■ 対象疾患群

- 一般小児科疾患
- 在宅医療支援
- 複数臓器あるいは多面的問題にわたる疾患・症候群
- 外科系疾患で入院中の患者さんの内科的管理
- PICU/HCU退室後の患者さんの医学的管理

■ 診療実績 (2025年度)

総入院数	242 人 (重複あり)
呼吸器疾患	68 人
消化器疾患	24 人
神経筋疾患	25 人
泌尿器疾患	13 人
外傷・事故	12 人
検査目的	25 人
在宅移行支援	10 人
その他	96 人
外来初診	274 人
消化器症状	21 人
発熱・不明熱	17 人
呼吸器症状	21 人
頸部等の腫瘍	15 人
頭痛	16 人
胸痛	2 人
その他疼痛	19 人
倦怠感・めまい	30 人
睡眠の問題	7 人
発達・神経の症状	23 人
哺乳・摂食の問題	7 人
体重増加不良	24 人
頭囲拡大・形態の問題	8 人
被虐待・ネグレクト	1 人
全身管理依頼	7 人
その他	56 人

■ スタッフ紹介



科長
田中 学



医長
野田 あんず



医員
青木 亮介



医員
高木 美奈子



医員
山本 亮一



臨床検査科科長(兼任)
杉山 正彦

新生児科

当センターホームページ
「新生児科」



■ 診療内容

新生児科では、総合周産期母子医療センター及び埼玉県周産期医療ネットワークの基幹施設として、三次レベルのNICU(新生児集中治療室)で、重篤な新生児疾患に対する最先端の高度先進医療を行っております。特に超・極低出生体重児や超早産児は、MFICU(母体・胎児集中治療室)を完備した産婦人科(さいたま赤十字病院)と協働して積極的にハイリスク母体搬送を受け入れ、高度な周産期管理と新生児集中治療を行います。

また、呼吸障害、重症仮死児などの生後直後から治療が必要なハイリスク新生児は、当センター所有の新生児搬送車により埼玉県内各地へのお迎え搬送を行い、初期治療を行いながらNICUへ入院し、高度新生児集中治療を行います。

当センターを基軸とする埼玉県遠隔胎児診断支援システムは、県内産科医療機関とのネットワークによる胎児診断の遠隔支援を行っております。胎児診断された先天性疾患児は当センターの小児専門病院としての特性を生かし、循環器科、小児外科、心臓血管外科、脳神経外科など関連各科とさいたま赤十字病院産婦人科との連携で胎児診断、周産期管理、周術期管理を含めた診断と治療を行います。

■ 先進医療・特殊医療

- 出生体重500g未満の超低出生体重児の治療
- 在胎週数22週、23週台の超早産児の治療
- 低酸素性虚血性脳症に対する新生児低体温療法
- 重症呼吸障害に対する一酸化窒素吸入療法
- 重症代謝性疾患、重度腎不全に対する血液透析療法(CHDF)、血漿交換療法
- 重度呼吸循環不全に対する膜型人工肺による体外補助循環療法(ECMO療法)
- 先天性心疾患に対する低酸素療法

■ 対象疾患

- 出生体重2,000g未満の低出生体重児
- 多胎児(品胎、要胎)
- 新生児の呼吸循環不全、新生児仮死
- 先天奇形、先天性心疾患、代謝・内分泌異常、感染症、意識障害、痙攣など中枢神経異常徴候を有するハイリスク新生児
- 先天性心疾患、先天性外科疾患(先天性横隔膜ヘルニア等)など

■ 診療実績

2025年度総患児数は343人(前年比▲9.9%)でした。入院の内訳は、在胎週数が未熟で出生体重の小さい超低出生体重児(出生体重1,000g未満)が52人(前年度より+3人)、極低出生体重児(出生体重1,000-1,500g未満)が30人(前年度より▲17人)、低出生体重児(出生体重1,500-2,500g未満)が95人(前年度より▲2人)、超・極低出生体重児は合わせて総入院数の23.9%(前年度より▲1.7%)でした。在胎期間別内訳は22-24週:20人、25-27週:19人、28-30週:27人、31-33週:37人、34-36週:55人、37週以上:185人でした。重症新生児仮死や遷延性肺高血圧症、胎便吸引症候群、胎児診断されていた先天性心疾患児、先天性外科疾患児などの出生体重2,500g以上の患者さんは169人で総入院数の49.2%でした。当センターに入院した胎児診断症例(埼玉県遠隔胎児診断支援システム含む)は81人(前年度より▲2人)で、そのうち先天性心疾患児は44人、先天性外科系疾患児は32人、その他の疾患は12人(重複あり)でした。胎児診断症例以外で院外から入院となった先天性心疾患児は19人、先天性外科系疾患児は26人(重複あり)でした。特殊治療としては人工換気療法188件(入院患児の54.8%)、サーファクタント補充療法71件、一酸化窒素吸入療法43件、低体温療法12件、ECMO0件、CHDF0件でした。死亡数は12人(2025年度以外の出生6人を含む)で剖検率は58.3%であり、染色体異常・奇形症候群などでの死亡数は8人(染色体異常・複雑奇形症候群7人、先天性代謝性疾患1人)でした。

■ スタッフ紹介



科長
川畑 建



医長
菅野 雅美



医長
米元 純



医長
関野 将行



医長
関野 知佳



医長
今西 利之



医長
玉置 祥子



医長
伊藤 一之



医長
角谷 和歌子



医長
齋藤 真知子



医長
齋藤 光里



医員
伊藤 璃津子



医員
伊元 栄人



医員
竹林 寛史



非常勤医師
岩谷 綾香

医員
中川 遼太

医員
四宮田 萌々子

代謝・内分泌科

当センターホームページ
「代謝・内分泌科」

■ 診療内容

代謝・内分泌科では、主にホルモンの異常及び先天代謝異常による病気を診療しています。当科を受診するきっかけとして多いものには、「身長が小柄である(低身長)」、「身長の伸びが良くない」、「身長の伸びが良すぎる」といった身長に関係すること、「体重の増えが良くない(やせ)」、「体重が増えすぎる(肥満)」といった体重に関係すること、「陰毛が生えてきた」、低年齢の女の子で「胸がふくらんできた」、「生理が始まった」といった身体の外見上に関係すること、そして「甲状腺が腫大している」、「学校検尿で尿糖陽性を指摘された」、「生まれてすぐの検査で異常があると言われた」などがあります。

具体的に当科で診ている病気は、成長ホルモン分泌不全性低身長症、ターナー症候群、肥満(肥満症も含む)、思春期早発症、甲状腺機能亢進症、甲状腺機能低下症、尿崩症、糖尿病(Ⅰ型、Ⅱ型)、先天性甲状腺機能低下症、先天性副腎過形成症、フェニルケトン尿症、くる病などです。

また、当センターはさいたま市を除く埼玉県全体の新生児マススクリーニング検査(タンデムマスによる)を行っており、陽性患者には当科の医師が、出生した病院を通じて保護者に受診を促し、早期に診断し治療を行っています。

治療は医師だけではなく、糖尿病・肥満・アミノ酸代謝異常症(フェニルケトン尿症など)・尿素サイクル異常症など食事療法が必要な疾患に対しては、管理栄養士も積極的に診療に関わっています。

近年、医療の進歩は目覚ましく、新しい薬剤・機器の開発に伴い治療方法も変化してきています。糖尿病領域のうち、特にⅠ型糖尿病について紹介します。Ⅰ型糖尿病の治療にはインスリン治療が不可欠ですが、これまでのⅠ日4回程度のインスリン皮下注射による治療だけではなく、インスリンポンプを用いた持続皮下インスリン注入療法(CSⅡ療法)、更には持続血糖モニター(CGM)の登場で、皮下組織に穿刺したセンサーにより、間質液中のグルコース濃度を連続して測定する機器を併用したSAP療法が普及してきています。現在当科では約100名の小児期発症Ⅰ型糖尿病の診療を行っており、約35%の患者さんにCSⅡ療法を行って血糖コントロールをしています。良好な血糖コントロールを保つためには血糖自己測定が必要で

すが、前述したCGMの機器でポンプと連動しない持続血糖測定器(デキシコムG7)を用いることで、SAP療法を行っていない患者さんも血糖変動を容易に知ることができるようになりました。当科では約75%の患者さんにCGMを導入し、血糖自己測定と併せて治療に用いています。これらの治療方法を個々の患者さん毎にその時の生活スタイルに合わせて、適宜相談しながら対応しています。

また、当科で診療する疾患は小児医療だけではなく、成人医療も必要とするものが多いため、小児病院という特殊性から内科へ引き継いでいくことが必須のため、移行期医療にも取り組んでいます。

■ 診療実績

2025年度の新患数は671人で、その中には新生児マススクリーニングの精査20人が含まれます。受診理由の内訳は、低身長が最も多く266人、次いで思春期早発131人、甲状腺機能低下38人、肥満26人、糖尿病15人、そのほか性腺機能低下、くる病、甲状腺機能亢進、高脂血症などです。入院は延べ201人で、その内訳は成長ホルモン分泌刺激試験32人、糖尿病11人(Ⅰ型など)、甲状腺機能亢進症(バセドウ病)2人、新生児マススクリーニング精査1人などです。

■ スタッフ紹介

科長
会津 克哉医長
阿部 清美医長
梁 偉博



■ 診療内容

消化器・肝臓科は2026年4月に発足10年目を迎えました。当科は日本では非常に数少ない小児の消化器病診療を専門とし、食道・胃・十二指腸から小腸・大腸に至る消化管疾患、肝臓・胆道系疾患、膵臓疾患及び栄養に関する疾患全ての診断・治療を行っています。安心・安全な医療を第一とし、常にグローバルな視点を持ち、根拠に基づいた質の高い専門的な医療を行います。

以下によく当科にご紹介いただく症候と対象疾患を記載します。時間帯・祝祭日に関わらずいつでも迅速に対応いたしますので、軽微な症状でもご相談いただければと存じます。

■ 対象となる症状

腹痛(慢性・急性)、吐き気・嘔吐、消化管出血(吐血・黒色便・血便)、長引く下痢、便秘、
体重増加不良、体重減少、栄養障害、黄疸・胆汁うっ滞、肝障害(AST・ALT値上昇)

■ 対象疾患

● 消化管疾患

潰瘍性大腸炎、クローン病、腸管ペーチェット病、
超早期発炎症性腸疾患、
単一遺伝子異常に伴う炎症性腸疾患、
難治性下痢症、吸収不良症候群、
消化性潰瘍(ヘリコバクターピロリ感染症)、
異物誤飲、消化管アレルギー、
過敏性腸症候群、機能的ディスペプシア、
若年性ポリープ、消化管ポリポース、
IgA血管炎(ヘノッホ・シェーンライン紫斑病)、
慢性便秘症、食道静脈瘤など

● 肝臓疾患

急性肝炎、慢性肝炎(B型・C型肝炎)、
急性肝不全、乳児胆汁うっ滞症候群、
肝硬変、原発性硬化性胆管炎、自己免疫性肝炎、
脂肪肝(NASH)、薬物性肝障害、
門脈圧亢進症、代謝性肝疾患(ミトコンドリア病、
シトリン欠損症、ウィルソン病)など

● 胆道・膵疾患

総胆管結石、胆嚢結石、肝門部空腸吻合部狭窄、
急性膵炎、慢性膵炎(遺伝性膵炎)など

潰瘍性大腸炎、クローン病などの炎症性腸疾患(IBD)は成人だけでなく小児でも患者数が急激に増加しています。現在まで乳児から高校生までの400名を超えるIBDの患者さん診断・治療を行ってきました。長期間入院が必要な場合、病院に併設されている埼玉県立けやき特別支援学校と早期から連携を取り学習支援を行います。また日本炎症性腸疾患協会主催のIBDこどもキャンプのお手伝いや当科主催のIBDこども倶楽部という医療従事者と患者さん、患者さん同士をつなぐ交流事業も行っています。2025年4月には小児IBDセンターを設立しました。医師、看護師だけでなく薬剤師や栄養士、地域連携・相談支援センター職員など院内の多職種が協力し、一人ひとりの患者さんの医療的だけでなく社会的ケアにも取り組んでいます。

2019年度から移植センターが新設され、さいたま赤十字病院と協同し小児の生体肝移植診療を開始しました。

当科も食道静脈瘤の内視鏡治療や栄養管理などの術前管理に関わっています。現在は急性肝不全の緊急移植に対応する多科診療科にわたるチーム医療体制も整備され、当科もその一員としての責務を担っています。

当科では口腔から肛門までの全消化管と膵胆管造影を含む内視鏡検査及び経皮的肝生検を施行しています。小児に消化器内視鏡検査はできないと思われる医療関係者もありますが、そんなことはありません。当センターには細径内視鏡など全年齢、いかなる体格の症例にも対応できる内視鏡が完備されています。また検査中は麻酔科医が最適な麻酔で管理してくれるため、患者さんは苦痛なく検査を受けることができます。

■ 診療実績

2025年度は757件(上部消化管内視鏡343件、大腸内視鏡296件、カプセル内視鏡71件、バルーン内視鏡26件、胆膵内視鏡21件)の内視鏡検査と10件の経皮的肝生検を施行しました。



大腸内視鏡検査の様子

■ スタッフ紹介



科長
岩間 達



医長
南部 隆亮



医長
原 朋子



医長
吉田 正司



非常勤医師
山本 和也

腎臓科

当センターホームページ
「腎臓科」

■ 診療内容

腎臓科では、夜尿症から末期腎不全(腹膜透析)に至るまで、腎移植を除くほぼ全ての小児腎疾患を対象としております。疾患に応じて、当センターの泌尿器科、小児外科、耳鼻咽喉科、放射線科、病理診断科などの各診療科と連携しながら診療を行っております。腎生検(経皮的及び腹腔鏡下)については、全国的にも小児領域で有数の施行件数を有する施設の一つであり、麻酔科医師及び小児外科医師との連携により、様々な体格の患者さんに対して低侵襲かつ安全に実施可能です。当科が特に専門性を有する疾患としては、特発性ネフローゼ症候群、IgA腎症、紫斑病性腎炎、ループス腎炎(全身性エリテマトーデスに伴う腎合併症)などの慢性腎炎並びに難治性夜尿症及び昼間尿失禁が挙げられます。なお、科長の藤永は、日本小児腎臓病学会及び日本夜尿症・尿失禁学会の理事を務めております。

■ 先進医療・特殊医療

1. ネフローゼ症候群に対する免疫抑制薬・生物学的製剤の豊富な使用経験

小児のネフローゼ症候群は、その多くが原因不明の特発性であり、ステロイド治療により尿蛋白が消失(寛解)する割合が約90%と高いことが特徴です。一方で、寛解後も約30~40%はステロイド減量に伴い再発を繰り返すステロイド依存性を示し、その多くが成人期へ移行します。このような症例では、ステロイドや免疫抑制薬に伴う重篤な副作用(低身長、肥満、骨粗鬆症、高血圧、シクロスポリンによる腎障害など)が問題となります。当科では、難治例に対して免疫抑制薬(ミコフェノール酸モフェチルなど)や生物学的製剤(リツキシマブ、オビヌツズマブ)を用いた最新の薬物療法に豊富な経験を有しており、成人期以降も、さいたま赤十字病院などの腎臓内科と連携しながら長期的なフォローアップを行っております。ネフローゼ症候群については、初発例を含め、是非当科へご紹介いただけますと幸いです。

2. IgA腎症/紫斑病性腎炎(IgA血管炎関連腎炎)に対する扁桃摘出術による早期寛解

IgA腎症及び紫斑病性腎炎(IgA血管炎関連腎炎)は、慢性腎炎の中で最も頻度の高い疾患ですが、腎生検及び治療介入のタイミングは施設により差があります。小児期には無症状であっても、蛋白尿が持続する場合には、20~30年後に末期腎不全へ進行する可能性が指摘されています。当科では、成人領域で有効性が確立されているステロイドパルス療法と扁桃摘出術の併用療法(扁桃摘出術療法)を導入しており、小児においても国内有数の施行実績を有しております。本治療は、長期のステロイド内服を要する従来治療と比較して、成長障害や肥満などの副作用が少なく、早期の蛋白尿消失及び再燃抑制が期待できる点が特徴です。発症早期にご紹介いただくことで、より高率に寛解が得られる可能性があるため、積極的なご紹介をお願い申し上げます。なお、科長の藤永及び医長の櫻谷は小児IgA腎症及びIgA血管炎の診療ガイドライン作成に関わっております。

3. 昼間尿失禁と夜尿症に対する積極的治療

当科では、夜尿症専門外来において、5歳以降の昼間尿失禁及び6歳以降の夜尿症に対する積極的な診療を行っております。30年以上にわたる診療実績と豊富な臨床経験を背景に、排尿記録に基づくきめ細かな管理に加え、各種薬物療法及びアラーム療法を組み合わせることで、ほとんどの症例において夜尿頻度の改善が得られております。特に頻回の夜尿を認める症例に対しては、初回から三者併用療法(デスマプレシン、抗コリン薬、コードレスアラーム機器)を導入しており、さらに難治例には新規β3受容体作動薬(ピベグロン)を用いるなど、先進的な治療を実践し、良好な

治療成績を報告しております。なお、夜尿外来を担当する科長の藤永は、夜尿症診療ガイドライン作成委員を務めております。

■ 対象疾患

- ① 特発性ネフローゼ症候群の診断・治療
- ② 3歳児健診時の検尿、学校検尿などで血尿、蛋白尿を指摘された方の管理
- ③ 急性糸球体腎炎(溶連菌感染症など)の診断・治療
- ④ 慢性糸球体腎炎(IgA腎症、紫斑病性腎炎など)の診断・治療
- ⑤ 膠原病(全身性エリテマトーデスなど)の腎合併症の診断・治療
- ⑥ 急性腎不全(溶血性尿毒症症候群など)に対する急性血液浄化療法
- ⑦ 慢性腎不全に対する維持透析療法(腹膜透析のみ)
- ⑧ 尿路感染症の治療・管理
- ⑨ 先天性腎尿路異常(水腎症、膀胱尿管逆流症、多嚢胞腎など)の診断・管理
- ⑩ 夜尿症、昼間尿失禁の診断・治療

■ 診療実績(2025年1月~12月)

- 外来患者人数 10,578人(腎臓外来7,879人、夜尿外来2,699人)
- 入院患者人数 336人(延べ人数3,478人)
- 腎生検 合計 85人(うち腹腔鏡下1件)

ステロイド依存性・抵抗性ネフローゼ症候群	25件
IgA腎症	14件
紫斑病性腎炎	18件
ループス腎炎	11件
膜性増殖性糸球体腎炎	4件
尿細管間質性腎炎	2件
無症候性蛋白尿(微小変化)	4件
無症候性蛋白尿(巣状分節性糸球体硬化症)	1件
感染後急性糸球体腎炎	3件
びまん性メサンギウム細胞増多	1件
Alport症候群	1件
その他	1件

■ スタッフ紹介(2026年4月1日)



科長 藤永 周一郎
医長 櫻谷 浩志
医員 小野 貴広
医員 齋藤 彩
医員 関根 麻衣
医員 平岡 由衣

感染免疫・アレルギー科

当センターホームページ
「感染免疫・アレルギー科」



■ 診療内容

当センターは、日本アレルギー学会、日本リウマチ学会の教育施設に認定されています。小児リウマチ学会の「小児リウマチ診療中核施設(2023年改訂)」(全国で77施設)に指定されています。日本小児感染症学会認定指導医(専門医)教育研修施設として、研修生を受け入れています。研修施設は全国で30施設に限られ、関東地区では11施設、埼玉県では当センターが唯一の認定施設です。

感染免疫・アレルギー科は教育研修として全国から集まる研修医の指導ばかりでなく、先進的で高度な小児医療を目指しています。感染症・自己免疫疾患・アレルギー疾患などを対象とし、幅広く、かつきめの細かい診療を行っています。入院診療はもちろん、外来での患者さんの診療のほかに、予防接種外来、生活アレルギー外来も行っています。院内全ての診療科からの感染症診療コンサルテーションにも応じ、コンサルテーション数は2025年度490件(前年比20件減)でした。主科とともに診療を行い、院内全体で抗菌薬適正使用を推進しています。感染対策チームにも所属し、院内感染対策において主要な役割を担っています。

■ 先進医療・特殊医療

日本で数少ない小児リウマチ性疾患の専門診療科で、若年性特発性関節炎、全身性エリテマトーデス、若年性皮膚筋炎、高安動脈炎、結節性多発動脈炎、IgA血管炎、ベーチェット病、ANCA関連血管炎、慢性再発性多発性骨髄炎など幅広い領域の診療を行っております。リウマチ性疾患においてはステロイドパルス療法、ガンマグロブリン大量療法、免疫抑制剤を用いた治療以外にも生物学的製剤(IL-6阻害薬:アクテムラ®、抗TNF α 抗体製剤:ヒュミラ®、ヒト型抗ヒトIL-1 β モノクローナル抗体:イラリス®、完全ヒト型抗BLySモノクローナル抗体製剤:ベンリスタ®)や抗CD20モノクローナル抗体製剤:リツキシマブなどを積極的に使用しています。薬物療法で治療効果不十分の重症患者さんにおいては、集中治療科の協力の下、積極的に血漿交換・白血球除去療法を行っています。リウマチ専門医2名が中心となり、2021年度からリウマチ・膠原病外来を新たに開設いたしました。

先天性サイトメガロウイルス(cCMV)感染症に合併する感音難聴の進行や精神運動発達遅延を予防する目的で、2023年度から症候性cCMV感染症に対して新たに保険適用となったバルガンシクロビルによる内服治療を積極的に行っています。耳鼻咽喉科、眼科との協力の下、他施設からの診療依頼も多く、県外の患者さんも多数受け入れています。また2021年度からは、サイトメガロウイルス外来を新たに開設いたしました。

川崎病については、通常の治療に関わらず、状態が改善しない難治例を中心に受入れを行っています。冠動脈瘤の合併を予防すべく、生物学的製剤(レミケード®)やシクロスポリン、血漿交換などの急性期治療を積極的に行っています。

周期性発熱を呈する自己炎症性疾患においては、家族性地中海熱・高IgD症候群(メバロン酸キナーゼ欠損症)・TNF受容体関連周期性症候群(TRAPS)・クリオピリン関連周期性発熱症候群等の鑑別を目的とした遺伝子検

査を遺伝科の協力の下行っています。

原発性免疫不全症(生まれつき抵抗力が低い病気)が疑われる場合も様々な検査により診断を確定し、入院・外来治療を行っています。また慢性肉芽腫症に対するインターフェロン γ 治療や難治性慢性蕁麻疹に対する高用量抗ヒスタミン剤治療も当センターで行っています。また様々な治療においてコントロール不良の重症気管支喘息に対するエクリズマブ(ゾレア®)を用いた治療も行っています。

■ 対象疾患

- 感染症全般(ウイルス、細菌、真菌等)
- リウマチ・膠原病
- 川崎病
- 自己炎症・免疫不全症
- アレルギー性疾患
(食物アレルギー、気管支喘息、蕁麻疹) など

■ 診療実績

直近3年間の診療実績を下記に示します。

(人)	2023年度	2024年度	2025年度
入院患者延数	5,519	3,625	3,899
外来患者延数	5,910	5,787	5,669
新規患者数	396	344	331

入院患者さんの多くは、感染症、リウマチ・膠原病、川崎病です。

■ 専門外来のお知らせ

1. リウマチ・膠原病外来

- 診療日(要予約):毎週火曜日・午後、第1、3、5水曜日・午前
- 担当医:佐藤 智(日本リウマチ学会専門医)
上島 洋二(日本リウマチ学会専門医)

2. サイトメガロウイルス外来

- 診療日(要予約):毎週金曜日・午前
- 担当医:菅沼 栄介(小児感染症専門医)

■ スタッフ紹介



科長
菅沼 栄介



医長
佐藤 智



医長
上島 洋二



医長
古市 美穂子

医長
真保 麻実

医員
谷 柚衣子

血液・腫瘍科

当センターホームページ
「血液・腫瘍科」



■ 診療内容

血液・腫瘍科では、造血器腫瘍や固形腫瘍などの小児がん及び良性の血液疾患全般の診療を行っています。造血器腫瘍には、白血病・悪性リンパ腫などが含まれ、固形腫瘍は、神経芽腫・横紋筋肉腫・肝芽腫・腎芽腫・脳腫瘍などがあります。良性疾患も全般に対応しています。

当センターには無菌病棟が整備されており、造血幹細胞移植の豊富な実績があります。初発例に加え、再発・難治性白血病の患者さんの受入れも対応しています。

固形腫瘍の治療には手術も含めた集学的治療が必要となります。当科では、小児外科・脳神経外科・整形外科・集中治療科・病理診断科・放射線科など多診療科と連携し、総合的な診療を行っています。

■ 小児がん拠点病院としての取組

当センターは、全国に15施設の小児がん拠点病院の一つに指定されています。埼玉県内の診療基盤を担うとともに再発・難治性の小児がんに対する診療支援にも注力しています。再発・難治の治療や、治験参加を目的とした紹介に対しては、関東甲信越に加え、東北・九州など全国からの転院を受け入れています。また埼玉県小児がん診療連携協議会を設置し、入院治療のみならず、療養中の生活、学業支援、長期フォローアップにおいても地域連携の強化を図っています。

さらに、当センターはがんゲノム医療連携病院に指定されており、がん遺伝子パネル検査を保険診療として提供しています。一部の患者さんにおいては、治療選択肢の拡大につながっています。

■ 多施設共同臨床研究への取組

当センターは日本小児がん研究グループ(JCCG)の中核施設として臨床研究に参加しています。当科スタッフは各種委員会に参画し、臨床試験の立案及び遂行に関与しています。これらの臨床試験への参加により、患者さんは現時点で最善と考えられる治療を受けることが可能となります。また、中央診断により、複数の専門家による診断の妥当性が担保されています。

■ 小児血液・がん医療を行うための環境整備

当センターには、抗がん剤治療や造血幹細胞移植を受ける患者さんのための無菌病棟(28床)が整備されています。感染症対策は予後及び生活の質(QOL)に大きく影響するため、重要な基盤となっています。

また、PICU/HCUといった集中治療室を備え、重症患者に対しては集中治療科と連携した高度医療を提供しています。これにより、生存率の向上及び寛解後のQOL改善に寄与しています。

■ スタッフ紹介



副病院長
康 勝好



科長
荒川 ゆうき



医長
森 麻希子



医長
福岡 講平



医長
大嶋 宏一



医長
渡邊 健太郎



医長
三谷 友一



医長
神鳥 達哉



医長
笠井 慎

医員 市川 やよい
医員 合原 遥
医員 武村 真

さらに、けやき特別支援学校との連携により、入院中も継続した教育が可能です。理学療法士によるリハビリテーションも実施し、体力低下の予防に努めています。

■ 診療実績

2025年度の血液・腫瘍科の初診患者数は291人で、うち血液腫瘍は52人、固形腫瘍新患数は43人、良性疾患は196人でした。また、造血幹細胞移植数は、2025年度で27人でした。沢山のご紹介をいただいております。深謝申し上げます。

最近6年間の診療実績

(件)

	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
造血器腫瘍	55	57	53	61	72	52
ALL	23	22	18	28	32	23
AML	4	9	15	10	13	8
CML	4	1	1	0	2	0
まれな白血病	1	2	1	3	1	5
MDS/MPD	2	4	2	2	1	2
非ホジキンリンパ腫	4	2	5	5	5	1
ホジキンリンパ腫	2	1	2	2	2	1
その他のリンパ増殖性疾患	0	0	0	0	0	0
組織球症 HLH	0	2	0	1	2	1
組織球症 LCH	4	11	2	4	8	4
その他の組織球症	2	0	0	0	1	1
その他の造血器腫瘍	0	0	0	0	0	2
ダウン症 TAM 登録	9	3	7	6	5	4
固形腫瘍	44	48	48	51	48	43
神経芽腫瘍群	7	7	4	6	4	8
網膜芽腫	3	1	3	2	5	1
腎腫瘍	1	3	0	1	5	2
肝腫瘍	5	5	3	3	0	4
骨腫瘍	1	1	7	6	6	8
軟部腫瘍	2	2	2	6	1	4
胚細胞腫瘍	7	9	4	3	4	3
脳・脊髄腫瘍	13	14	17	19	19	10
その他	5	6	8	5	4	3
良性疾患	61	59	71	96	93	116
再生不良性貧血及び類縁疾患	7	4	5	4	5	2
貧血その他良性血液疾患(免疫異常症含む)	54	55	66	92	88	114
その他	54	64	68	52	83	80
合計	214	228	240	260	296	291

■ 地域医療機関の皆様へ

小児がん全般に加え、先天性凝固異常症、貧血、血小板減少症などの良性疾患全般の診断治療を担っています。お困りのことがございましたら、お気軽にご連絡ください。安全で誠実な医療の提供に努めてまいります。

遺伝科

当センターホームページ
「遺伝科」



■ 診療内容

遺伝科では様々な先天異常症候群に関する診療を担当しています。その主な柱は、1) 診察による臨床的診断、2) 遺伝学的検査による精密診断、3) 疾患の自然歴情報に基づいた健康管理、4) 集団外来などの特別な診療形態も活用した患児・家族支援、5) 遺伝カウンセリングです。

■ 先進医療・特殊医療

● 先天性異常症候群の健康管理プログラムの運用

先天異常症候群は、多様な合併症に成長と発達の障害を伴うことも多く、多科・多部門との連携が必須です。疾患の自然歴情報を基にした健康管理・フォローアッププログラムの策定と運用を進めています。

● ダウン症候群総合支援外来(DK外来): 表1

1989年から継続している集団外来です。生後6か月未満(参加開始時点)のダウン症候群のある赤ちゃんご家族を対象とし、月1回(第2木曜日)、計6回(半年間)のプログラム制で行っています。遺伝科外来を受診していただいた後にこの外来をご案内しています。

● 先天異常症候群の集団外来: 表2、3

様々な先天異常症候群についての集団外来を開催しています。個別診察と集団外来をセットとし、集団外来は第一部: 情報提供、第二部: 家族交流の二部構成です。希少疾患であるが故に十分な情報もなく、診断を受けたお子さんご家族の不安と孤独は深刻です。正確で十分な情報の提供による疾患の理解支援とともに、同じ疾患を持つご家族同士の交流を通じた心理支援にもなるようにと考えています。この外来には関東圏を中心に、ときには全国遠方からも参加されています。

● 遺伝性疾患に対する精密診断

遺伝検査室において各種の遺伝学的検査(染色体・FISH検査、シーケンス解析、MLPA解析、マイクロアレイ染色体検査、次世代シーケンス解析)で精密診断を図っています。2022年度からはゲノム医療推進プロジェクトとして重症患者に関する次世代シーケンス解析を用いた迅速診断(Rapid-NGS診断)等にも取り組んでいます。

表1. ダウン症候群総合支援外来(DK外来)プログラム

開催月	内容	担当
4・10	健康管理について	遺伝科
5・11	運動発達について (赤ちゃん体操)	理学療法
6・12	医療福祉情報	メディカルソーシャルワーカー
7・1	食べる機能の発達	栄養/認定看護
8・2	遊びとコミュニケーション	作業療法
9・3	子どもの発達について	臨床心理

表2. 先天異常症候群の集団外来(一部掲載)

ブラダー・ウィリー	9pトリソミー・ 9pトリソミーモザイク	ラッセル・シルバー
ウィリアムズ	4pモノソミー	チャージ
22q11.2欠失	5pモノソミー	ルビンシュタイン・ テイビ
カブキ	12pトリソミー	コフィン・シリス
ソトス	18q-/リング18	モザイク型ダウン
ベックウィズ ウィーデマン	コステロ	コルネリア・デ・ランゲ
ピットホプキンス	スミス・マゲニス	コフィン・ローリー
ヤコブセン	ヌーナン	アンジェルマン

(疾患名の“症候群”略)

表3. 2025年度 先天異常症候群の集団外来実績
(オンライン・ハイブリッド開催)

8疾患108家族

疾患名 (症候群)	テーマ	参加 家族	うち 県外
ラッセル・シルバー	本人同胞への疾患情報の 提供について	9	4
カブキ	カブキ症候群集団外来-25年を 振り返って-自然歴情報の蓄積	26	24
5pモノソミー	疾患の概要と健康管理	8	2
22q11.2欠失	22q11.2欠失症候群集団外来-25年を 振り返って-自然歴情報の蓄積	15	0
ブラダー・ ウィリー	ブラダー・ウィリー症候群集団外来-約30 年を振り返って-自然歴情報の蓄積	9	1
9pモノソミー	疾患概要と健康管理	7	2
ウィリアムズ	ウィリアムズ症候群集団外来-25年を 振り返って-自然歴情報の蓄積	16	7
ソトス	疾患概要と健康管理	18	8

■ スタッフ紹介



科長
大場 大樹



医長
大橋 博文



医長
永井 康貴

循環器科

当センターホームページ
「循環器科」



■ 診療内容

循環器科の診療は先天性心疾患が中心ですが、心筋炎や心筋症などの後天性心疾患・肺高血圧症・川崎病後の冠動脈疾患・不整脈・自律神経関連疾患、など多岐にわたる診療を行っています。検査は、心電図・心臓超音波・ホルター心電図・トレッドミル運動負荷試験・心臓カテーテル検査・胎児心エコー・経食道心エコー・薬物負荷試験などのほか、造影CT・MRI・核医学などによる専門的な検査も行っています。

外来は平日全ての曜日で午前・午後行っており、新患枠は毎日設け、定時以外にも随時受け入れています。また胎児心エコー外来を月・金曜日に、心臓検診外来（心臓検診後の精密検査・その後の定期検診）を木曜日に行っています。

2022年2月に血管撮影装置の更新を行い（写真）、より精度の高い心臓カテーテル検査・治療が可能な体制が整いました。心臓カテーテル検査・治療は、水曜日以外毎日行い（水曜日は脳血管造影）、麻酔体制・看護体制も整備され、より安全なカテーテル検査・治療が行えるようになっていきます。外科手術は火曜日以外、連日行い（火曜日が術前説明日）、臨時・緊急手術も随時行っています。2025年度の入院患者数は年間663人、新患は循環器科外来が736人・心臓検診外来が100人でした。

■ 先進医療・特殊医療

- 先天性心疾患に対するカテーテル治療を積極的に行っています。閉鎖栓を用いた心房中隔欠損・動脈管開存に対するカテーテル治療は認可施設でのみ可能で、当センターは認可施設となっています。心房中隔欠損に対する新しい閉鎖栓も使用可能となり、治療の幅が広がっています。また、さいたま赤十字病院との医療連携で、経皮的肺動脈弁留置術の施設認定を取得いたしました。今後、積極的に行っていく予定です。
- 先天性心疾患に対する手術は、新生児から成人期までの重症疾患に対応しており、心臓血管外科の協力もあり全国トップレベルの成績です。
- 胎児心エコーの診断精度が向上し、重症例は出生直後に計画的なカテーテル治療・外科手術を行う場合があります。多職種での事前シミュレーションも行っています。
- 学校心臓検診は年間5万人以上を実施し、QT延長症候群の遺伝子診断・WPWの薬物負荷試験なども行っています。
- 2021年4月にこどもハートセンターを設立し、心疾患のより充実した治療を行えるように努力しています。

2025年度

心臓カテーテル検査症例 341件 内訳

心室中隔欠損	23
心房中隔欠損	32
動脈管開存	9
房室中隔欠損	23
肺動脈弁狭窄	10
肺動脈狭窄	2
大動脈弁狭窄・閉鎖不全	9
僧帽弁狭窄・閉鎖不全	3
両大血管右室起始	26
修正大血管転換	6
川崎病（冠動脈瘤あり）	15
肺動脈性肺高血圧症	3
ファロー四徴症	27
総肺静脈還流異常	16
完全大血管転換	19
肺動脈閉鎖（純型）	11
肺動脈閉鎖（心室中隔欠損伴う）	6
総動脈幹遺残	4
単心室	29
大動脈縮窄複合	7
大動脈弓離断	2
三尖弁閉鎖	8
左心低形成症候群	13
心筋疾患	7
その他	31

インターベンションカテーテル 治療症例 107件 内訳

血管拡張術：大動脈	1
血管拡張術：肺動脈	15
血管拡張術：静脈	18
血管拡張術：Stent	2
血管拡張術：人工血管	6
肺動脈弁形成術	6
大動脈弁形成術	1
動脈管塞栓術（コイル）	0
動脈管塞栓術（Amplatzer閉鎖栓）	10
心房中隔欠損閉鎖術（閉鎖栓）	23
体肺側副血管コイル塞栓術	23
ステント留置術	0
心房中隔裂開術	2
その他	2

（手技の重複症例があります）



血管撮影装置

■ スタッフ紹介



こどもハートセンター長
星野 健司



科長
河内 貞貴



医長
伊藤 伶司



医長
真船 亮



医長
百木 恒太



医長
増田 詩央



医長
築野 一馬



医員
中村 祐輔



医員
野竹 慎之介

神経科

当センターホームページ
「神経科」



■ 診療内容

神経科では、神経筋疾患、運動障害、知的障害を有した子ども並びにそれらの疾患と障害のリスクを持っている子どもたちの診療を行っています。具体的な疾患名は、てんかん並びにてんかんの鑑別が必要な様々なけいれん性疾患、急性脳炎、急性脳症、神経変性疾患、末梢神経疾患、さらに筋疾患としては重症筋無力症、先天性ミオパチー等です。現在、平日全ての外来において初診を受け付けているため、通常はほとんど数日以内で予約を取ることが可能です。神経科初診では緊急紹介を必要としないことが多くありますが、急性脳炎、急性脳症のような緊急性が高く重篤な疾患では、救急診療科、集中治療科と協力し、初診対応は救急診療科、急性期の集中治療は集中治療科、神経科では亜急性期以後の治療を行う等、疾患に応じて複数の診療科と連携・協力して治療を行っています。

また2024年4月に小児てんかんセンターが設立され、てんかん外科手術が可能となりました。今まで以上に充実した包括的なてんかん診療を実践してまいります。

さらに、2025年4月より埼玉県内で追加2疾患の拡大新生児マススクリーニングが開始されました。追加2疾患の一つとして脊髄性筋萎縮症が対象となり、早期診断と治療が可能となりました。

上記の神経系疾患、筋疾患のほかに、知的発達症、自閉スペクトラム症、多動症、注意欠如・多動性障害等の神経発達症群も小児神経科医が診療すべき重要な疾患群の一つです。これらの疾患・障害は、てんかんのような薬物療法による診療が優位な疾患とは異なり、患者さんの行動観察と保護者の障害受容の観点から、ある程度ゆとりを持った落ち着いた診療体制が重要と考えられます。そのため、神経科では、精神的な診療の必要性が少なく、幼児期・就学前の神経発達症群に関しては、神経科外来とは別に保健発達部門の発達外来において診療しています。

■ 先進医療・特殊医療

てんかんの発作型に応じた適切な治療選択を行うために、発作が連日起こるような薬剤抵抗性てんかん(難治てんかん)を対象に、発作時ビデオ脳波同時記録により非てんかん発作の鑑別とてんかん発作の詳細な解析を行い、外科治療の適応等の判断を行っています。また、他施設と協力し、原因不明の神経疾患の遺伝子検査等を中心とした研究的な診療の取組も行っています。さらに、特定の要件を満たす医療機関や登録医のみ使用が許可されている薬物についても、その必要性を吟味した上で特殊医療として行っています。

■ 対象疾患

神経科は主に脳と、それにつながる末梢神経並びに筋肉の病気を持つ子どもたちを診療しています。次のような症状・疾患の方が対象になります。

- けいれん性発作、意識消失発作(てんかん、熱性けいれん(熱性発作)、自然終息性乳児てんかん等)
- 筋力低下・麻痺、眼瞼下垂(末梢神経障害、筋ジストロフィー、ミオパチー、重症筋無力症等)
- 発熱に伴うけいれん性発作、意識障害(急性脳炎、急性脳症、急性散在性脳脊髄炎等)

■ 診療実績(2025年度)

● 外来初診患者数557人(救急対応は除く)

けいれん性疾患 243人(てんかん 173人(うち乳幼児てんかん性スパズム症候群(West症候群含む) 11人)、熱性けいれん(熱性発作)21人)、神経皮膚症候群 17人(うち神経線維腫症 4人、結節性硬化症 3人)、転換性障害等の精神疾患 28人、チック症 13人、慢性頭痛 30人、失神・起立性調節障害 25人、知的発達症 33人、自閉スペクトラム症・ADHD 19人、脳性麻痺 14人、ほか

● 入院患者数 332人(延べ)

けいれん性疾患 141人(てんかん 141人(うち乳幼児てんかん性スパズム症候群(West症候群含む) 33人))、急性脳炎・脳症 3人、神経免疫疾患 52人(自己免疫性脳炎 29人、多発性硬化症 0人、重症筋無力症 8人、CIDP 7人)、代謝性疾患・神経変性疾患 10人、神経皮膚症候群 5人、重複障害児の感染症 34人、重複障害児の筋緊張亢進に対する治療 3人、末梢神経障害 2人、転換性障害 10人、ほか

● てんかん教室

てんかんに関する正しい知識の普及を目的に、1996年から開催しています。現在は、年に1回の開催で、2025年11月第36回てんかん教室を開催しました。2026年度10～11月の土曜日に開催予定ですので、後日当センターホームページ⇒各部門の紹介⇒内科系診療部門の神経科⇒取組み／てんかん教室(<https://www.saitama-pho.jp/scm-c/shokai/naikashinryo/shinke/02-19-02-01.html>)において開催内容を公開する予定です。どなたでもご参加できますので関心のある方をご紹介いただければ幸いです。よろしく願います。



てんかん教室の様子



当センター
ホームページ
「てんかん教室」



スタッフ一同



当センター
ホームページ
「小児てんかん
センター」

■ スタッフ紹介



病院長
岡 明



科長
菊池 健二郎



医長
松浦 隆樹



医長
平田 佑子



医長
代田 惇朗



医長
竹内 博一



医員
堀田 悠人

医員
加藤 実咲

精神科

当センターホームページ
「精神科・精神保健外来」

■ 診療内容

精神科では中学校入学前のお子さんを診療しており、こころの問題に対応しています。行動の問題、感情の問題、身体症状、学校等への不適応などが対象となります。これらの背景に、認知発達の未熟さがあったり、生活環境の問題があったり、あるいは、過去の恐ろしい体験の影響があったりします。また、慢性的な疾患がストレス因となって精神的な影響がみられる場合もあります。お子さんや保護者の方との面接や心理検査、生理学的検査から、症状の成り立ちを理解して診断し、必要な対応を考えていくことになります。

臨床心理士によるカウンセリングなどセンター内コ・メディカルとの連携を取って対応していますが、訓練や療育は行っていません。

生活環境が影響を与えている場合など、地域の他機関との連携を取って介入を進めることもあります。

■ 対象疾患

認知発達の問題、強い不安や恐怖感、ストレス反応、心理的要因が関与すると考えられる身体症状、それらを背景とする行動の問題などが対象となります。

■ 診療実績(2025年度)

「精神科外来」疾患別新規患者数

診断カテゴリー	新規患者数 (人)
うつ病エピソード	2
恐怖症性不安障害	1
他の不安障害	6
強迫性障害	4
重度ストレス反応[重度ストレスへの反応] 及び適応障害	36
解離性(転換性)障害	4
身体表現性障害	12
摂食障害	2
習慣及び衝動の障害	4
軽度精神遅滞	38
中等度精神遅滞[知的障害]	5
重度精神遅滞[知的障害]	6
最重度精神遅滞[知的障害]	3
学力の特異的発達障害	19
運動機能の特異的発達障害	1
混合性特異的発達障害	1
広汎性発達障害	110
多動性障害	60
行為障害	2
小児期に特異的に発症する情緒障害	2
小児期及び青年期に特異的に発症する 社会的機能の障害	6
チック障害	9
計	333

■ スタッフ紹介

科長
舟橋 敬一医長
平山 優美

小児外科

当センターホームページ
「小児外科」

■ 診療内容

小児外科では、新生児から成人期までのあらゆる年齢を対象に、胸部・腹部の外科疾患を幅広く診療しております。また近年では小児外科領域でも普及の進んでいる、内視鏡手術に積極的に取り組んでおり、おなかや胸の手術あとが目立たず、筋や骨の成長、運動機能の発達に影響の少ない手術を目指して、20年以上実績を積み重ねてまいりました。

これからも新しい治療法を積極的に取り入れ、また、患者さんやご家族に安心して手術を受けていただけるように努力してまいります。

■ 対象疾患

● 新生児疾患

食道閉鎖症、腸閉鎖症、横隔膜ヘルニア、臍帯ヘルニア、鎖肛、Hirschsprung病等

● 頸部体表疾患

咽頭梨上窩瘻、側頸瘻、甲状腺腫瘍、喉頭軟化症

● 消化器疾患

胃食道逆流症、肥厚性幽門狭窄症、虫垂炎、メッケル憩室、腸重積症、潰瘍性大腸炎

● 肝胆膵疾患

胆道拡張症、胆道閉鎖症、胆石症、脾腫

● 呼吸器疾患

肺分画症、CPAM、肺嚢胞、自然気胸、気道異物

● 泌尿生殖器疾患

停留精巣、卵巣腫瘍、陰嚢閉鎖症、陰唇癒合症

● 腫瘍疾患

神経芽腫、肝芽腫、腎芽腫、脾腫瘍、横紋筋肉腫、縦郭腫瘍

● 小児外科一般疾患

鼠径ヘルニア、臍ヘルニア、漏斗胸、胸腺腫

■ 先進医療（内視鏡手術）

当科では、特に内視鏡手術に力を入れており、多くの疾患に適應しております。現在、内視鏡外科学会技術認定医2人が在職し、虫垂炎や鼠径ヘルニアなどの一般的に多く行われている疾患から、他の医療機関では難しい新生児食道閉鎖症に対する胸腔鏡下食道閉鎖症根治術、嚢胞性肺疾患に対する胸腔鏡下肺切除術、胆道拡張症に対する腹腔鏡下胆道拡張症根治術など、胸腔や腹腔のほぼ全ての疾患に内視鏡手術を導入しております。3D内視鏡手術や、ICGによるナビゲーション手術など最新の設備と、新しい手術法なども積極的に取り入れております。

2021年からは、日本で4施設でしか行われていない胆道閉鎖症に対する腹腔鏡下葛西手術を行っております。腹腔鏡での胆道閉鎖症の治療成績は開腹手術と遜色なく、生体肝移植が必要になった場合でも、移植手術の負担を軽減することができます。

今後も患者さんの負担が少なく、整容性に優れ、成長発達に影響が少ない手術を行ってまいります。

■ 診療実績（2025年）

入院総数	582人(実数)
外来新患者数	435人
外来延患者数	5,660人
手術総数	725件
内視鏡手術	271件(うち胸腔鏡手術30件、腹腔鏡手術241件)
頸部:気管切開術	22件
喉頭気管分離術	3件
正中頸嚢胞手術	1件
腕頭動脈離断術	1件
胸部:胸腔鏡下肺切除術	13件
胸腔鏡下食道閉鎖症根治術	3件
胸腔鏡下肺部分切除(自然気胸)	6件
胸腔鏡下横隔膜ヘルニア根治術	3件
縦隔腫瘍	2件
胸腔鏡下Nuss手術	4件
腹部:腹腔鏡下鼠径ヘルニア根治術	140件
精巣固定術	47件
腹腔鏡下虫垂切除術	27件
腹腔鏡下噴門形成術	18件
腹腔鏡下胃瘻造設術	11件
消化管穿孔(新生児・乳児・学童)	18件
臍帯ヘルニア・腹壁破裂	3件
腹腔鏡下肥厚性幽門狭窄症手術	8件
腸閉鎖症	2件(総合周産期母子医療センター連携症例)

開腹腫瘍全摘術	4件(小児がんセンター連携症例)
腹腔鏡下胆道拡張症手術	5件
腹腔鏡下胆道閉鎖症根治術(葛西手術)	3件
腹腔鏡下脾臓摘出術	4件
腹腔鏡下鎖肛根治術	2件
開放鎖肛根治術	11件
腹腔鏡補助下ヒルシュブルグ病根治術	3件
腹膜透析カテーテル挿入	6件
卵巣腫瘍摘出術	8件
門脈還流異常症	2件
中心静脈カテーテル挿入	139件(小児がんセンター・総合周産期母子医療センター連携症例)



3D内視鏡手術

■ スタッフ紹介

小児外科専任



病院長補佐・科長 川嶋 寛

1995年卒
日本小児外科学会専門医・指導医
日本外科学会専門医
内視鏡外科技術認定医
小児がん治療認定外科医



医長 出家 亨一

2007年卒
日本小児外科学会専門医・指導医
日本外科学会専門医
内視鏡外科技術認定医
がん治療認定医



医員 小川 祥子

2016年卒
日本外科学会専門医



医員 津坂 翔一

2018年卒
日本外科学会専門医



医員 高城 翔太郎

2015年卒
日本小児外科学会専門医
日本外科学会専門医



医員 海老原 統基

2019年卒
日本外科学会専門医

移植外科・
小児外科兼任

医員 松田 理奈

2018年卒
日本外科学会専門医

水田 耕一

1991年卒

納屋 樹

2013年卒

平田 義弘

2002年卒

心臓血管外科

当センターホームページ
「心臓血管外科および心臓麻酔部門」



■ 診療内容

心臓血管外科では、新生児期から成人期に至るまで、外科的治療が必要な全ての先天性心臓病に対して診療を行っています。対象は、超低出生体重児を含む新生児から、思春期、そして近年増えている成人先天性心疾患までの広範囲にわたります。その中には、一度に修復術が可能なものから、幾多の段階的手術を要するものまで多種多様な心臓病があります。

子どもたちの心臓病の治療にはチーム医療が欠かせません。新生児科、循環器科、麻酔科、集中治療科、臨床工学部などと連携を密にし、それぞれの専門領域の知識と経験を生かしながら、外科治療の成績の向上に努めています。定期手術に加え、新生児・乳児期を含む緊急手術症例や、急性循環不全や呼吸不全などのECMO症例にも24時間緊急体制を整えて対応しています。

また、隣接するさいたま赤十字病院産婦人科、麻酔科、小児科との連携のもと周産期医療を展開して新生児治療に力を注いでいます。

■ 治療方針

「子どもたちの未来は、私たちの未来」という病院理念のもと、心臓病を持つ子どもたちとご家族のため、丁寧で安全な外科治療に努めています。日々の手術や周術期治療の改善に取り組むだけでなく、子どもたちやご家族が少しでも不安なく準備や入院生活ができるよう、術前術後のコミュニケーションも重視しています。我々が目指すべきゴールは、心臓病を持つ子どもたちが手術を乗り越えた将来、心身ともに健康で制限のない生活を送ることだと信じています。また、重症度に合わせて手術時期や術式を選択し、重症心疾患を持つ子どもたちが少しでも質の高い生活を送れるような手術を目指しています。

- ①早期根治手術を目指し生理的循環への早期順応を図ります。
- ②小切開手術や無輸血手術適応症例に対して積極的に取り組みます。
- ③重症複雑心疾患例において、新生児期から時期を逸することなく適切な段階的手術を実施します。
- ④循環器科と密接に連携を取り、詳細な術前形態診断、カテーテル治療と手術を組み合わせたハイブリッド治療を推進しています。
- ⑤胎児診断例ではさいたま赤十字病院と連携を取り計画分娩後の緊急手術対応を含めて、重症度に即した治療を実践しています。
- ⑥重症の循環不全、呼吸不全児に対するECMO対応を24時間体制で行っています。

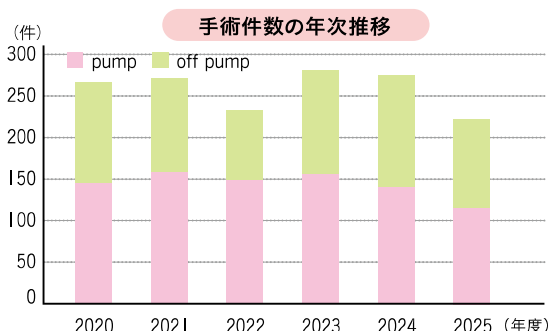
■ 対象疾患(術式)

- 超低出生体重児 動脈管開存症(小切開クリップ閉鎖)
- 大動脈縮窄、大動脈弓離断症(人工心肺下一期修復、肺動脈絞扼)
- 左心低形成症候群(新生児期肺動脈絞扼、乳児期早期ノーウッド手術)
- 重症先天性大動脈弁狭窄(心臓カテーテル的治療、外科的大動脈弁切開)
- 複雑先天性心疾患(体肺動脈シャント、肺動脈絞扼)
- 総肺静脈還流異常症、完全大血管転位症(新生児期修復)
- 総動脈幹遺残症(新生児期根治手術、肺動脈絞扼)
- 非チアノーゼ性心疾患修復術～心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、房室中隔欠損症、動脈管開存症など(乳児期修復)
- ファロー四徴症(1歳前後の心内修復)
- エプスタイン奇形(三尖弁形成術)

- 単心室症に対するグレン、フォンタン手術(1～2歳での早期フォンタン手術)
- 成人先天性心疾患(再手術を含む)

■ 診療実績(2025年度)

心臓血管外科手術総数は228件であり、人工心肺手術は120例でした。周産期治療開始から9年が経過し、胎児診断に基づいた出生直後の開心術などの経験が増加するだけでなく、特に左心低形成症候群や内臓錯位症候群などの複雑心奇形が増えています。重症心疾患例の経験も蓄積し、治療成績も安定してきました。低出生体重児、早産児、より重症心疾患の人工心肺症例が増える中で、院内ハートチームの連携のみならず、さいたま赤十字病院ハートチームとの連携も調いました。今後も更なる安全性と手術成績向上に努める所存です。



■ スタッフ紹介



ハートセンター長
(科長兼務)
星野 健司



医長
野村 耕司



医長
濱屋 和泉
(心臓麻酔部門長)



医長
鵜垣 伸也



医長
清水 寿和



医員
徳永 滋士



医員
小倉 翔太

脳神経外科

当センターホームページ
「脳神経外科」

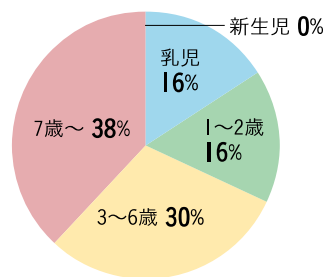
■ 診療内容

脳神経外科では水頭症や二分脊椎症、頭蓋縫合早期癒合症などの中枢神経系奇形や脳脊髄腫瘍、脳血管疾患などを診療対象とし、関連診療科との連携を重視しながら最先端の診療を行うよう心掛けています。なお病院移転以降、頭部外傷に関しては外傷診療科が主体となり診療を行っています。

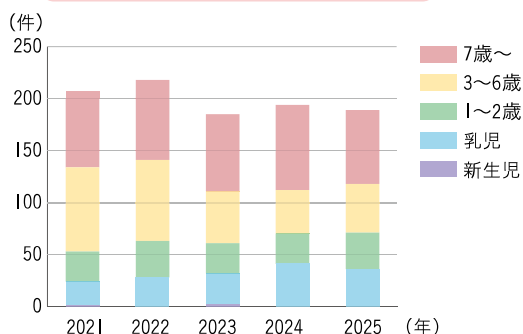
年間の脳神経外科外来患者数は延べ約2,800人で、約190人の方が入院治療を受けており、その約30%は2歳以下の乳幼児です。

年間の手術件数は約120件で、そのうちの45%が水頭症や二分脊椎などの中枢神経系奇形、10%が脳腫瘍となっております。2017年以降、ニューロナビゲーションシステムや神経内視鏡手術を積極的に導入し安全かつ低侵襲な手術を心掛けています。2020年からは「赤ちゃんの頭の形外来」を開設し頭蓋骨縫合早期癒合症の早期診断、位置的頭蓋変形（向き癖）に対するヘルメット矯正に対応しています。さらに2024年度からは小児てんかんセンターを開設し、てんかんの外科診療を開始しています。

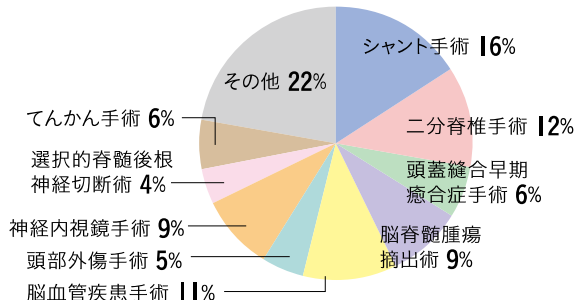
年齢別入院患者数 2021年～2025年 合計 1,000人



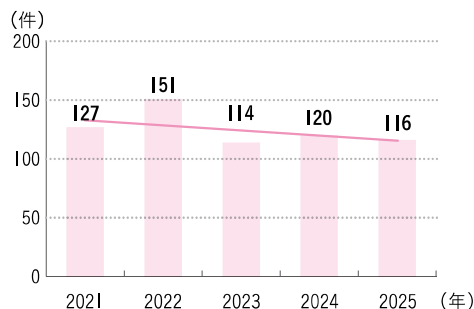
年間入院患者数推移 2021年～2025年



手術術式内訳 2021年～2025年 合計 512人



年間手術件数推移 2021年～2025年



■ 先進医療・特殊医療

● 水頭症治療

シャント手術に加えて神経内視鏡手術を積極的に行っています。水頭症の治療では年齢や原因、病態に応じた適切なシャントシステムの選択及び手術術式の選択により、シャント手術の再手術率は開院当初の約80%から10%に減少しています。

● 二分脊椎症治療

新生児科と泌尿器科、整形外科、小児外科等の診療部門、理学療法士と看護師等複数の部門と連携し診療を行っています。2017年以降は、さいたま赤十字病院と連携し新生児科と共に胎児診断例にも対応しています。

● 頭蓋縫合早期癒合症治療

従来の頭蓋顔面形成術に加えて骨延長器を用いた手術を取り入れることにより再手術率は従来の約50%から5%に改善しています。2020年に「赤ちゃんの頭の形外来」を開設しました。

● 脳腫瘍診療

2003年以降、血液・腫瘍科、放射線科、病理診断科など複数の診療科との合同カンファレンスを積極的に行い、治療方針を決定しています。2017年以降はニューロナビゲーションシステムを導入し安全で確実な手術計画のもと、腫瘍の摘出を行い、正確な診断のもと治療を行っています。

● 痙性麻痺（脳性麻痺）

当センターでは脳性麻痺による下肢痙縮に対して歩行能力の改善を目的に選択的脊髄後根神経切断術を行っています。選択的脊髄後根神経切断術とは下肢の痙性麻痺に対して術中脊髄誘発電位測定により異常神経を同定し切断する手術のことで、整形外科医や理学療法士と共に多職種で病状を評価し、手術適応判断やリハビリテーションを行っています。また2019年からは重症の痙直型四肢麻痺に対してバクロフェン髄腔内投与療法を開始し、整形外科手術やボツリヌス毒素療法とともに病態に応じた治療を行っています。

● てんかんの外科診療

2024年に小児てんかんセンターを開設し薬剤抵抗性てんかんに対する外科的治療を開始しました。脳神経外科では、てんかんの焦点切除術や脳葉切除術、脳梁離断術、迷走神経刺激療法などのてんかんに対する外科的治療を行っており、その治療適応は神経科と共にてんかんの病態を評価し決定しています。

● 頭部外傷

2021年以降、頭部外傷の診療は外傷診療科が主体となり行っています。

■ スタッフ紹介

科長	栗原 淳 日本脳神経外科学会専門医・指導医 日本小児神経外科学会理事・認定医 日本神経内視鏡学会技術認定医 日本こども病院神経外科医会役員 (2021年研究会会長) Craniosynostosis研究会世話人 (2020年研究会当番世話人) 日本二分脊椎研究会世話人
医長	宇佐美 憲一 日本脳神経外科学会専門医・指導医 日本小児神経外科学会評議員・認定医 日本神経内視鏡学会技術認定医 日本てんかん学会専門医・指導医・評議員 迷走神経刺激装置植込資格 日本脳神経外傷学会認定専門医
医員	佐々木 みなみ 日本脳神経外科学会専門医 日本小児神経外科学会認定医 日本神経内視鏡学会技術認定医 日本脳神経外傷学会認定専門医

整形外科・リハビリテーション科

当センターホームページ
「整形外科」



■ 診療内容

整形外科では四肢の骨・関節全ての疾患を取り扱い、その疾患は四肢先天異常や、脊椎疾患、股関節疾患、スポーツ障害、外傷など非常に多岐にわたります。小児と成人では扱う疾患が大きく異なり、小児整形における専門的な知識と経験が必要です。外来は週3回(火・木・金)で、医師は常勤医4人、レジデント1人体制で診療を行っております。予約制ですが、早期治療が必要な疾患(先天性内反足、先天性股関節脱臼、化膿性疾患、ペルテス病、大腿骨すべり症、外傷など)については、電話連絡にて随時受け付けております。病院の移転に伴い救急診療科が新たに開設され、時間外での外傷患者の対応が可能となりました。乳幼児の骨折や基礎疾患を伴う患者さんの骨折については当センターにて治療を行いますが、さいたま赤十字病院高度救命救急センターとも連携しており、外傷についてはいつでも対応可能な体制となっています。(原則として10歳以上の外傷はさいたま赤十字病院に治療をお願いしています。)

新たな試みとして、2024年4月から小児運動器センターを開設し、装具外来の細分化を行い従来の「装具外来」から「運動器外来」へ名称を変更しました。(詳細は次項⑤)

■ 先進医療・特殊医療

①ボツリヌス療法

2010年度から脳性麻痺児に対するボツリヌス療法(ボトックス注射)を行っています。痙性が強い部分に施注することで筋肉が緩み、歩容の改善や筋緊張をコントロールすることが可能です。

②開排位持続牽引整復法

小児整形外科の代表的な疾患として先天性股関節脱臼が挙げられますが、2013年度から従来のリーメンビュゲル法(以下Rb法)のほかに開排位持続牽引整復法(以下FACT)を導入しています。Rb法で整復が得られなかった症例、Rb法の適応基準から除外される高位脱臼や高度の開排制限、歩行開始後症例に対しFACTを行っています。持続牽引による愛護的な整復操作により骨頭壊死の発生が低いのが特徴です。

③乳幼児股関節検診

乳児健診にて股関節の開排制限を指摘された乳児や脱臼ハイリスク児(家族歴、骨盤位分娩など)の二次検診を当センターにて行っています。超音波とX線を用いて診断を行い、脱臼を認めない場合にも、育児指導を行っています。

④側弯症治療・専門外来

側弯症専門医による側弯症専門外来を行っています。(2018年6月から当センターでも側弯症手術を開始しています。)また、必要に応じて都内の大学病院・中核病院と連携を取って治療に当たっています。

⑤小児運動器センター(Pediatric Motor Development Clinic: PMDC)開設

これから加速する少子高齢化に向けて小児運動器疾患をより詳細に「個別化の医療」を提供できるようにしました。四つの診療部門と各部門で蓄積されたデータを活用する「学術・分析部門」に分け、当センター整形外科、PT、OT、地域の療育センターで協力し、包括的な診療を目指します。

- 脳性麻痺部門
- スポーツ部門
- 血液・がん部門
- 発達・運動部門
- 学術・分析部門

また従来の装具外来を「運動器外来」とリニューアルして診療時間も2時間に拡大しました。(毎週火曜日14時～16時 3階リハビリテーション室、発達診断室)

内容も運動器を評価する「運動器ロコモ外来」、装具の作成中心の「運動器ブレース外来」、車いす等の作成を中心とした「運動器シーティング外来」と細分化しました。

■ 対象疾患

● 四肢先天異常

母指多指症、多合趾症、合指(趾)症、先天性内反足

● 下肢変形

O脚、X脚、外反扁平足

● 骨・関節疾患

先天性股関節脱臼、ペルテス病、大腿骨頭すべり症、円板状半月板

● 炎症性疾患

化膿性関節炎、骨髓炎、若年性特発性関節炎

● 麻痺性疾患

脳性麻痺、二分脊椎、分娩麻痺

● 脊椎疾患

環軸椎回旋位固定、側弯症(側弯症専門外来)

● 外傷

● スポーツ障害

● 骨系統疾患

● 骨軟部腫瘍

(埼玉県立がんセンター、自治医科大学附属さいたま医療センターと連携)

● その他

筋性斜頸、歩容異常、下肢長不等

■ 診療実績

2025年度新患外来患者数は979人となり、前年度の958人、2022年度の934人から着実に増加しています。増加の原因の一つは乳児1か月健診に股関節検診(発育性股関節形成不全)が含まれる形になった影響と推察しています。

手術件数におきましては449件を実施し(2024年度539件、2023年度462件、2022年度534件)、Covid-19以前の水準よりは多いが、近年では最小の手術件数でした。

緊急手術は外傷が中心を占め、地域の救急医療にも積極的に対応しています。診療内容としては四肢先天異常の手術を中心に、運動器疾患手術や関節鏡手術も幅広く行っています。

また、近年注力しておりますAYA世代(中学生、高校生)の先天性股関節脱臼後の遺残変形や臼蓋形成不全に対する寛骨臼回転骨切り術(CPO)につきましても症例数が順調に増加しています。

■ 特色

当センターには特別支援学校が併設されており、学童期の治療期間が長期に及ぶ疾患(ペルテス病、大腿骨頭すべり症など)や早期退院が困難な症例では勉強しながら治療を行うことができます。

■ スタッフ紹介



病院長補佐・科長
平良 勝章



医長
根本 菜穂



医長
及川 昇



医長
町田 真理

応援医師
長尾 聡哉
大島 洋平
岡田 恭彰

形成外科

当センターホームページ
「形成外科」

■ 対象疾患

眼瞼の先天異常、口唇裂・口蓋裂、頭蓋・顎顔面骨変形症、耳介の先天異常、母斑・血管腫・血管奇形（リンパ管腫）、良性腫瘍、悪性腫瘍、手足の先天異常・外傷、瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド、熱傷、顔面骨骨折及び顔面軟部組織損傷、褥瘡・難治性潰瘍等

■ 診療内容

● 外来診療

形成一般外来、口唇口蓋裂外来、創傷ケア外来、口唇裂胎児診断外来、レーザー外来、耳のかたち外来

● レーザー治療（局所麻酔、全身麻酔）

Qスイッチルビーレーザー、Vビーム

● 手術（局所麻酔、全身麻酔）

乳幼児の手術は、術中・術後の安静のため、原則全身麻酔下で行っています。最短でも1泊2日以上入院が必要となります（手術の内容や患者さんの状態により、入院期間は異なります。）。

■ 先進医療・特殊医療

● 術前顎矯正

「唇顎口蓋裂」患者さんに対して、手術前の顎矯正（PNAM）治療を生後間もなくから開始することがあります。上顎骨の形成や鼻の形態改善に大きな効果が期待できる治療法です。さらに個々の状態や方針に合わせてより最適な治療を行うため唇裂口蓋裂（CLP）専門外来を毎週水曜日に行っています。

● 口唇裂胎児診断カウンセリング

「胎児おうち外来」では、妊婦検診で胎児の口唇裂を指摘されたご家族に対して、カウンセリングを実施しています。出生後の通院や治療の流れ・問題点などを全般的に説明します。確定診断や、胎児スクリーニングは、隣接するさいたま赤十字病院産婦人科で行っています。

● 耳介矯正治療

令和7年2月より、「耳のかたち外来」を開設しました。「生まれつき、何らかの耳介変形があり、矯正治療により改善の見込みがある」症例を対象として、診断・治療導入・指導を行っています。変形の程度に関わらず、早期から開始することが望ましいため、生後1～3か月くらいでご紹介ください。

■ 診療実績（2025年度）

	初診患者数 (人)	手術件数 (件)	全麻レーザー (件)
頭蓋顎顔面の異常	27	5	0
眼の異常	24	10	0
耳の異常	209	45	0
口唇口蓋裂	68	129	0
鼻咽腔閉鎖機能不全症	6	0	0
口の奇形（口唇裂以外）	16	15	0
手足・爪の奇形	58	40	0
体幹の異常	14	16	0
良性皮膚腫瘍・軟部腫瘍	157	59	0
悪性皮膚腫瘍	1	3	0
乳児血管腫	73	6	1
単純性血管腫	53	0	24
先天性血管腫	3	0	0
血管奇形	8	8	0
その他の血管腫	20	3	0
リンパ管腫・リンパ管奇形	17	8	0
色素性母斑（青色母斑含む）	40	48	0
扁平母斑	34	0	3
太田母斑	9	0	3
異所性蒙古斑	78	0	21
脂腺母斑・表皮母斑	17	27	0
外傷	80	17	0
熱傷	22	2	0
ケロイド・瘢痕拘縮	19	10	0
褥瘡・難治性潰瘍	1	1	0
炎症・変性疾患	10	5	0
その他	30	7	0
合計	1,094	464	53

■ スタッフ紹介

副病院長
渡邊 彰二科長
渡辺 あずさ医員
片岡 美紗

専攻医
糸洲 友視、田仲 木の香、吉岡 梓（研修生）

泌尿器科

当センターホームページ
「泌尿器科」



■ 診療内容

手術:腎尿路生殖器疾患に対し月曜日から木曜日までの週4日、全日枠(土曜日手術も不定期で実施)で手術を行っています。麻酔リスクの低い患者さんには1泊2日手術(手術当日の朝入院)も行っています。

入院:手術以外にも①尿路奇形の精査②神経因性膀胱児の尿水力学的検査や間歇自己導尿手技獲得目的での入院治療を行います。

外来:週5日の全てで新患外来を行っており新患予約の待機はありません。初診・再診ともに外来待ち時間短縮のため完全予約制としていますが、緊急性のある方の予約外診察も対応しています(お待たせすることがあります。)

■ 先進医療・特殊医療

①**尿道下裂手術:**難易度の高い尿道下裂手術を多く行っています。尿道下裂は複雑で合併症も多く極めて難易度が高い手術です。当センターでは遠位型に対しTIP/DIG/GUD法、近位型に対しSTAG/STAC法などの新しい術式を行い良好な成績を得ています。形成外科と協力し口腔粘膜を用いた再建手術(BrackaBMG法)なども積極的に行っています。機能・外観・長期予後全てを満足させるためには尿道下裂手術の経験豊富な施設で手術を行うことが好ましいです。

②**尿路内視鏡手術:**低～中程度の膀胱尿管逆流症における内視鏡的逆流防止術(ヒアルロン酸注入術)は保険収載後の約5年間で150件200尿管に施行しており治療成績も良好です。注入件数は本邦トップレベルです。後部尿道弁切開や尿管瘤切開など新生児期～乳児早期から多数行っています。

③**腹腔鏡下手術:**非触知精巣症例における腹腔下精巣検索は300例を超え、腹腔内精巣は100例を超えています。これにより非触知精巣&腹腔内精巣の存在部位と治療成績、治療方法を明確にしつつあります。また腹腔鏡下低形成腎摘除に加え、水腎症(腎尿管移行部狭窄症)に対し行う腹腔鏡下腎盂形成術(幼児以上に限定)はこれまで50例以上行い良好な成績と術後の早期回復を獲得しています。

早期離床、入院期間短縮、整容性の向上を目的として、これら尿路内視鏡手術と腹腔鏡下手術を中心にダブルJ尿管ステント法や尿道下裂術後の二重オムツ法などを併用し、低侵襲手術の拡大、増大、開拓をさらに進めています。

■ 対象疾患

外科的な腎尿路生殖器疾患を対象としています。

● 腎臓

水腎症、低形成腎、腎のう胞、腎結石、腎腫瘍(Wilms)

● 尿管

尿管瘤、水尿管症、尿管狭窄、尿管結石

● 膀胱

膀胱尿管逆流、膀胱憩室、膀胱結石、膀胱腫瘍(肉腫)、膀胱外反症、神経因性膀胱、膀胱炎

● 前立腺

前立腺腫瘍(肉腫)

● 尿道

尿道弁、尿道狭窄

● 性腺

尿道下裂、真性包茎、埋没陰茎、停留精巣、陰のう水腫、精索静脈瘤、精巣腫瘍、二分前置陰のう、性分化疾患(先天性副腎皮質過形成他)

■ 診療実績

過去5年間(2021～2025年度)の年間手術数は400人を上回っています。2021年はコロナ禍にも関わらず過去最高(470件/年)の手術件数を記録しました。直近5年間の主要手術内訳は概ね、水腎症への腎盂形成術80件(開腹法50件、腹腔鏡下手術30件)、膀胱尿管逆流防止術340件(開腹法200件、尿路内視鏡法140件)、尿道下裂初回手術200件、停留精巣固定術600件、性腺腹腔鏡下手術100件などとなっています。



スタッフ一同

■ スタッフ紹介



科長
大橋 研介



医長
吉澤 信輔



医長
小野 賀功



応援医師
小林 堅一郎



応援医師
堀 祐太郎

応援医師
多田 実

耳鼻咽喉科

当センターホームページ
「耳鼻咽喉科」

■ 診療内容

耳鼻咽喉科では主に4つの分野 ①難聴(診断・精査・治療(補聴器など)) ②全身麻酔下手術(耳、鼻、口腔、咽頭、喉頭、頸部の各領域) ③在宅気管切開管理 ④いびき・睡眠時無呼吸の精査・診断・治療 ⑤その他:言語、喉頭評価等を柱に適宜、言語聴覚士(ST)や認定看護師と共に評価や指導を行い診療に当たっております。

①難聴

● 診断・精査・補聴器

産科での新生児聴覚スクリーニングで要再検となった患者さんの精密聴力検査実施機関に指定されております。初診日にABR(睡眠下)施行及び結果説明を試みる早期対応については、全国的にも珍しく当科ならではの特徴です。早期発見、難聴精査、補聴器装用、療育開始が重要とされ、1-3-6ルールで生後1か月以内に難聴確定、3か月以内に補聴器装用開始、6か月以内に療育機関へとつなげることで言語能力の獲得が有効とされます。また先天性サイトメガロウイルス(CMV)感染症が原因による難聴は、感染免疫・アレルギー科と連携し精査が可能となり聴力改善の可能性が高まりました。

● 難聴ベビー外来

1歳未満の両側60dB以上の感音難聴が判明した場合は、難聴ベビー外来で対応し、難聴原因精査、聴覚管理、補聴器調整、その後の療育への橋渡しの存在として連携を取ります。

チーム医療(耳鼻咽喉科、各診療科、ST、看護師、社会福祉士、難聴児を持つボランティア)のもと、音楽療法(楽器を使った音遊び)や、保護者への講義を行っております。

②全身麻酔下手術

(耳、鼻、口腔、咽頭、喉頭、頸部の各領域)

耳領域:鼓室形成術、鼓膜チューブ留置術(一側は局麻下)、副耳切除術(結紮もしくは全麻下)など癒着性中耳炎に対するCartilage palisading techniqueを用いた鼓室形成術や、聴力改善手術は可能な限り就学前までに試験的鼓室解放術や難易度の高い聴力改善手術にも積極的に取り組んでおります。

③在宅気管切開管理

医療の進歩とともに新生児の救命率も高くなり、年々気管切開の患者数は増加傾向にあります。

特定行為研修区分呼吸器(長期呼吸療法に係るもの)関連の研修を修了した看護師が、手順書に基づき気管カニューレの交換ができるようになりました。医師は、カニューレ交換後の気管内ファイバースコープ検査のみ施行すればよく、外来での待ち時間の短縮及び医師の負担軽減に寄与しています。また特定行為研修修了看護師は患者さんに寄り添った形でカニューレ交換ができるため患者さんからの評判もよく、さらに件数を増やしていこうと考えています。

④いびき・睡眠時無呼吸の精査・診断・治療

扁桃、アデノイドの大きさのみではなく、airwayとなる鼻から喉頭レベルの評価を重視しております。慢性の咳(喘息など)や慢性鼻炎の治療は積極的に治療を行った上でアプノモニターでの精査などの上、治療を決定いたします。必要がある患者さんにはポリソムノグラフィー(入院)を実施し、客観的評価を行い手術適応の判断をいたします。

近年はハイリスク児(3歳未満、合併症、頭蓋骨顔面形態異常等)の手術相談が増えており、治療方法を検討し各関係科と協力して術後管理に当たっております。特に重症タイプには手術後にC-PAP導入の必要性などを想定しながら治療を進めております。

⑤その他

● 言語

ことばの発達遅延、ことばの数が少ない、発音が不明瞭、構音障害の場合、まず聴力が影響していないか適した聴力検査により評価し、口腔内(舌小帯、口蓋裂、粘膜下口蓋裂など)鼻咽腔閉鎖不全の診察の後、STによる評価・指導等を行います。舌小帯短縮症に対しては、哺乳・摂食・構音に影響する場合は、舌小帯形成術(全麻下)を検討します。

● 咽頭・嚥下機能評価

喘鳴評価では喉頭ファイバー下にて鼻～喉頭レベルの観察。また特にNICU/GCUからの依頼では哺乳障害を認める場合など、嚥下認定看護師とともに評価・指導を行います。

耳鼻咽喉科
外来受付耳鼻咽喉科
診察室

聴力検査室

耳鼻咽喉科診察室:診察室3室、診察ユニット、外来手術用顕微鏡(Leica 2台、Zeiss 1台)、電動昇降式診察ベッド3台、内視鏡3台設置。
聴力検査室:聴力検査室3室(乳幼児対象2室、小児対象1室)、補聴器外来室1室、鼓膜麻酔室1室

■ スタッフ紹介

外来及び手術

科長
浅沼 聡応援医師
安達 のどか

外来

応援医師
林 阿弥子非常勤医師
今井 直子



眼科

■ 診療内容

子どもの目は生まれてからすぐに見えているわけではなく、適切な視覚刺激を受けながら視覚感受性期と呼ばれる8歳頃までの間に発達していきます。この期間に発症する子どもの目の疾患の早期診断と治療を、眼科医と視能訓練士が協力して行っています。

疾患内容は、屈折異常弱視、斜視が半数以上を占めています。斜視は、診断から手術まで視機能を重視した診療を行っております。多領域にわたる疾患や症候群では、小児病院の特性を生かして複数科と連携しながら治療に当たります。

手術は、斜視、内反症など外眼手術、涙道、白内障を中心に行っています。乳児内斜視は0歳代から、間欠性外斜視は視機能の成長を確認しながら5歳から手術を行っています。ほぼ全例が全身麻酔下手術です。

また、視覚障害児への支援体制として、埼玉県立特別支援学校埼玉保一学園（県立盲学校）教諭による盲児教育相談を設けています。

■ 先進医療・特殊医療

涙道閉塞に対する涙道内視鏡治療、先天白内障手術、未熟児網膜症に対する抗VEGF硝子体注射、レーザー治療、小眼球・無眼球に対する義眼治療、アノマロスコープによる先天色覚異常精査

■ 対象疾患

斜視、弱視、全身疾患に伴う眼科疾患、先天眼瞼下垂、内反症、涙道閉塞、眼瞼腫瘍、未熟児網膜症、先天性眼振、白内障、角膜疾患、ぶどう膜疾患、網膜視神経疾患、緑内障など

■ 診療科からのお願い

スポットビジョンスクリーナーの二次精査につきましては、地域眼科受診をお勧めくださいますようお願い申し上げます。

白色瞳孔など緊急性の高い所見につきましては、早期対応が必要になるため地域連携・相談支援センターへご連絡くださいますようお願い申し上げます。

■ 診療実績

手術・処置・検査の内訳(2025年度)	症例数
外斜視	88
内斜視	31
その他の斜視	15
内反症	49
涙道閉塞	13
白内障 眼内レンズ挿入	13
白内障 水晶体偏位 無水晶体	9
後発白内障	1
緑内障 線維柱帯切開術	4
眼球摘出術	1
霰粒腫	12
結膜腫瘍	1
網膜光凝固術	7
全身麻酔下検査	1
未熟児網膜症に対する抗 VEGF 治療	8
未熟児網膜症に対する網膜光凝固	3
計	256

■ スタッフ紹介



科長
神部 友香



専攻医
田中 世莉

皮膚科

当センターホームページ
「皮膚科」



■ 診療体制・診療内容

現在常勤医2人体制で月曜日から金曜日まで診療を行っています。

皮膚科では0歳から15歳までの小児の皮膚全般にわたる病変に対して正確な診断・適切な診療を行います。完全予約制であるため、一人ひとり丁寧に診察を行い、病気の原因や予後、日常生活の注意点やスキンケアも含めた外用薬の使い方などについての指導も行っています。特に乳幼児期・学童期のアトピー性皮膚炎を含めた湿疹群や皮膚の良性腫瘍・悪性腫瘍の診断・治療及び母斑のレーザー治療に力を入れています。そのほか、皮膚感染症や難治性疾患の治療も行っています。さらに、当センターには専門の内科系・外科系診療科が充実しており、先天性疾患など病変が多岐にわたる疾患に対しても連携して総合的な診療を行っています。

■ 専門外来

● アトピー外来

アトピー性皮膚炎は慢性に経過し、かゆみのある湿疹を繰り返す疾患です。アトピー性皮膚炎に対する正しい知識を身につけていただき、一人ひとりに対応したきめ細かな診察、治療を行うことを心掛けています。治療は日本皮膚科学会アトピー性皮膚炎診療ガイドラインに基づき、保湿薬を基本として炎症期のステロイド薬や免疫抑制薬（タクロリムスやデルゴシチニブ、ジファミラストなど）の外用薬及び抗ヒスタミン薬内服による治療を中心として行っています。また、症状に応じて、デュピルマブやネモリズマブなどの生物学的製剤の注射やJAK阻害薬などの分子標的薬の内服も積極的に行っております。

● レーザー外来

毎週金曜日の午後にレーザー照射を行っています。当科で照射可能なレーザーはQスイッチルビーレーザーとVビームレーザーの2種類です。Qスイッチルビーレーザーは太田母斑、異所性蒙古斑などのいわゆる「青あざ」と呼ばれる色素病変の治療に用いられます。Vビームレーザーは単純性血管腫、母状血管腫などのいわゆる「赤あざ」と呼ばれる血管病変の治療に用いられます。

小さなお子さんや範囲の広い母斑に対しては短期間入院（火曜日入院、主に1泊2日）による全身麻酔下でのレーザー治療も行っています。

■ 対象疾患

- 湿疹や皮膚炎（アトピー性皮膚炎、おむつ皮膚炎、接触皮膚炎など）
- 蕁麻疹
- 血管腫・母斑（母状血管腫、単純性血管腫、太田母斑、異所性蒙古斑、色素性母斑や脂腺母斑など、ダーモスコピー検査も行っています。）
- 皮膚腫瘍（粉瘤、石灰化上皮腫など）
- 皮膚感染症（尋常性ざ瘡、尋常性疣贅、伝染性軟属腫、伝染性膿痂疹、蜂窩織炎、ヘルペス、白癬カンジダなど）
- 脱毛症
- 先天性疾患（神経線維腫症、色素失調症、眼皮膚白皮症など）
- 炎症性角化症（乾癬など）
- 膠原病（エリテマトーデス、強皮症、皮膚筋炎）などの難治性疾患

■ 診療実績（2025年度）

新規患児数	1,131人
レーザー・手術件数	924件



レーザー室

■ スタッフ紹介



科長
玉城 善史郎

医員
北原 祐里恵

移植外科

当センターホームページ
「移植外科」



■ 診療内容

移植外科は、2019年度(令和元年度)に当センターに新設された診療科です。隣接するさいたま赤十字病院と連携し、内科的治療が困難な末期肝障害の子どもたちに対して、安全性に配慮した肝移植医療を行っています。

我が国における生体肝移植は、開始から35年以上が経過し、これまでに小児生体肝移植3,921例、成人生体肝移植7,249例が実施されています。小児例は全体の約35%を占めており、小児生体肝移植は全国約15施設を中心に、年間100～110例が施行されています。

当センターでは、埼玉県内にとどまらず、関東甲信越、北陸、北海道・東北地方からの患者さんも広く受け入れ、日本の小児肝移植医療における拠点の一つとしての役割を担っています。また、他施設で移植を受けた患者さんも含め、移植後の外来フォローアップを継続的に行っています。移植後の定期的なグラフト肝生検については、全身麻酔下で安全に実施しています。

■ 対象疾患

● 胆汁うっ滞性疾患

胆道閉鎖症、アラジール症候群、進行性家族性肝内胆汁うっ滞症、原発性硬化性胆管炎など

● 急性肝不全

原因不明、ウイルス性、新生児ヘモクロマトーシスなど

● 先天代謝異常症

ウィルソン病、OTC欠損症、CPSⅠ欠損症、シトルリン血症、メチルマロン酸血症、プロピオン酸血症、メープルシロップ尿症、糖原病など

● その他

肝芽腫、門脈還流異常症、先天性肝線維症、原因不明肝硬変、肝GVHD、ランゲルハンス細胞組織球症、ミオチューブラーミオパチーなど

■ 先端医療

2019年4月、さいたま赤十字病院と当センターの2施設により「さいたま新都心医療拠点移植センター」を開設し、同年9月に第1例目の生体肝移植術を実施しました。ドナー手術はさいたま赤十字病院消化器外科が担当し、レシピエント手術は当センターの移植外科・小児外科・形成外科が連携して行っています。廊下でつながりながらも運営母体が異なる2施設による臓器移植医療は国内初の取組であり、新たな医療体制の先駆けとなっています。

2022年度に腹腔鏡下肝ドナー手術が保険適用となり、当移植センターでも同年度より導入しました。これまでに30例を安全に実施しており、国内最多の実績を有しています。

■ 診療実績

2025年度の年間総手術件数は78例で、そのうち生体肝移植術は10例でした。2019年度以降の累積生体肝移植件数は63例であり、患者生存率・グラフト生存率はいずれも約97%と非常に良好な成績を示しています。2022年度からはドナーに対して腹腔鏡下手術を導入し、レシピエントにおいても将来を見据え、創が小さく目立たないよう配慮した手術を行っています。今後も、患者さん及びご家族にご満足いただける質の高い肝移植医療を提供してまいります。

■ スタッフ

日本外科学会専門医	3人
日本外科学会指導医	2人
日本小児外科学会専門医	2人
日本移植学会認定医	3人
日本肝臓学会専門医	2人
日本消化器外科学会専門医	1人
日本小児栄養消化器肝臓学会認定医	1人
日本がん治療認定医機構 がん治療認定医	1人
日本小児血液・がん学会 小児がん認定外科医	1人
日本医師会認定産業医	1人



レシピエント手術



当センターにおける肝移植術後の腹部創の一例
(左:術後10ヶ月、右:術後5年)

■ スタッフ紹介



科長
水田 耕一



医長
平田 義弘



医員
納屋 樹

応援医師 井原 欣幸

応援医師 山田 直也

移植コーディネーター 田村 恵美

小児歯科

当センターホームページ
「小児歯科」



■ 診療内容

小児歯科では、主に有病児・心身障害児に対し齲蝕(むし歯)処置、口腔外科処置、歯周処置、咬合誘導処置及び予防管理を行っています。

齲蝕処置については、早期発見・早期治療が必要であり、歯髄(神経)に至るような齲蝕については痛みや腫れが生じ、最終的には根尖病巣が出現します。このような段階になると、もはや保存が困難となり抜歯となることがほとんどです。移植前・治療前の患者さんにとって口腔内の感染巣有無がその後に影響を及ぼすことは広く周知されています。入院患者さんに対しての依頼の多くは手術前、治療前の口腔内における感染巣有無のチェックとなります。

また、近年、当センターでは小児がんセンター、移植センターを併設しました。周術期の入院患者さんに対しての口腔管理が当科にとって重要な役割となってきています。必要不可欠である患者さんの口腔ケアは当科在中の認定歯科衛生士たちがその一翼を担っています。

造血幹細胞移植等を受けた患者さんや心疾患を有する患者さんは歯肉炎を発症することが多く、重度心身障害児は全顎的に歯石の付着が確認されます。これらの患者さんに対しては、定期的なブラッシング指導、歯石除去を行うことで、全身の健康維持を図っています。

口腔外科処置については、口腔外科専門の応援医師により行っています。小帯切除、埋伏過剰歯の摘出、第3大臼歯(親知らず)の抜歯、腫瘍の摘出などが主な処置内容です。

咬合誘導(小児矯正)処置については、自費診療で行っています。齲蝕や外傷が原因で早期の抜歯となった後の保隙などの受動的咬合誘導処置、歯性の反対咬合・非抜歯可能な叢生の治療などの能動的咬合誘導処置が主な内容です。なお、形成外科から依頼のある口唇口蓋裂等の歯科矯正については、矯正専門医が対応しています。

なお、齲蝕の本数が多く体動が激しい抑制困難な歯科治療非協力児や通法下で仰臥位にて開口することで呼吸が困難になる重度心身障害児に対しては全身麻酔下での処置も行っています。

さらに、救急診療科からの交通事故等で口腔周囲に損傷を受けた患者さんの依頼も頻繁に対応しています。

最後に当科は、出生から永久歯列完成まで、併設の医科の協力の下、健全な永久歯列完成を念頭においたトータル的な歯科治療を目指しています。

■ 診療実績(2025年度)

延べ患者数	4,766人(1日平均20.6人)
初診患者数	354人
全身麻酔下での歯科処置	15件
静脈内鎮静での歯科処置	3件

■ 診療科からのお知らせ

以前から多くの要望が寄せられていた一般外来の受入れに関して、常勤スタッフを増員し、2021年度から一般外来患者さんの受入れを開始しました。様々な理由で一般歯科医院での歯科治療が困難な患者さんに対し、紹介状持参をもって受付をいたします。



小児歯科診療室



歯科衛生士一同

■ スタッフ紹介



科長
高橋 康男



医長
武井 浩樹

集中治療科

当センターホームページ
「集中治療科」

■ 診療内容

集中治療科では、小児集中治療室(PICU)にて、生命に関わる重篤な状態に陥っている患者さんに対し迅速かつ的確な高度救急医療を提供します。集中治療科の診療の柱は以下の三つのカテゴリーです。

- ①埼玉県内全域及び隣接地域の小児の三次・救命救急医療
- ②開心術等大規模な手術を受ける患者さんの周術期管理
- ③院内患者の重症急変時の集中治療及び院内危機管理(院内心停止への対応やRRS)

内因系・外因系を問わず、あらゆる疾患及び病態に対応する総合診療医(Generalist)として、また、全身管理の専門医(Specialist)として、埼玉県及び隣接地域の重症小児の診療の役割を担っています。

24時間365日、院外からの重症患者の受入要請に対応しており、搬送にリスクを伴うと判断した場合に、当センターPICUスタッフによる搬送チームが依頼先病院へ出向いて「迎え搬送」を行い、院外からの紹介も積極的に受け入れています。

注:RRS(Rapid Response System)とは、あらかじめバイタルサインの異常などの基準を決め、その基準に抵触した場合は、医療者は誰でも、主治医を介さず直接RRS対応チームを呼び、迅速な介入により院内心停止を防ぐ仕組みです。

■ 先進医療・特殊医療

- 呼吸管理 高流量経鼻カニューラ酸素療法(HFNC)
非侵襲的陽圧換気、高頻度振動換気、気道圧開放換気
一酸化窒素吸入療法、体外式膜型人工肺(ECMO)
- 急性血液浄化療法 持続的血液濾過透析(CHDF)
血液透析、腹膜透析、血漿交換
- 循環管理 体外式膜型人工肺(ECMO)
- 中枢神経管理 頭蓋内圧・脳温モニタリング、低体温療法

■ 対象疾患

[各種臓器不全・重症病態]

- 緊急気道 クループ、喉頭・気管狭窄、気道異物
顔面外傷～各種の挿管困難等
- 呼吸不全 細気管支炎、重症肺炎、喘息重積
急性呼吸窮迫症候群:ARDS等

■ スタッフ紹介

科長
新津 健裕医長
谷 昌憲医長
中村 文人医長
齋藤 千徳医長
細谷 通靖医長
五十嵐 成医長
三浦 義文医長
駒井 翔太医長
横松 知咲子医長
末永 祐太

医員

河野 洋介
白川 隆介
宮野 真木子
大金 佑輔
星加 史郎
中嶋 幸人
金内 萌葉
佐々木 祐輔
米津 雅之
横山 亮子

非常勤医師
新津 麻子

- 循環不全 ショック、劇症型心筋炎、心筋症
重症心不全、不整脈等
 - 中枢神経障害 けいれん重積、急性脳炎脳症
頭蓋内出血、蘇生後脳症等
 - 急性腎不全、急性肝不全、代謝内分泌疾患
先天代謝異常症の急性増悪、糖尿病性ケトアシドーシス等、重症感染症(敗血症等)
 - 外因性疾患
窒息、溺水、熱傷、頭部外傷、多発外傷、薬物中毒、心停止等
- [周術期管理]
- 心臓血管外科による開心術・非開心術の周術期管理(先天性心疾患)
 - 小児外科、移植外科、脳神経外科、形成外科、耳鼻咽喉科、整形外科等による手術の周術期管理
 - その他、周術期に人工呼吸やモニタリングを必要とする重症症例

■ 治療方針

集中治療室には、小児集中治療の専門医が24時間体制で常駐し、主治医として全ての患者さんに責任を持った診療を行います。元から主治医のいる患者さん、手術の執刀医のいる患者さんについてはそれらの医師と緊密に連携し、共同で診療を行います。そして生命に関わる重篤な状態を脱し、一般病床に出られる状態に回復するまで診療します。

質の高い集中治療を安全に実践し、患者さんやご家族の苦痛・不安をなるべく軽減できるように、集中治療科医師のみならず関連する診療科医師やPICU・HCU看護師、臨床工学技士、理学療法士、病棟薬剤師、ソーシャルワーカー、チャイルド・ライフ・スペシャリストなどの関連職種と密に連携を取り、共にチーム一丸となって努力していきます。

■ 院外の皆様とのつながり

生命の危機に関わるような重篤な状態の救急患者さんを診療されている場合は、24時間いつでも当科までご連絡いただければ、ドクターカーを使った依頼元医療機関への迎え搬送も含めて、対応いたします(既に診断がついており、状態が安定している場合は、従来どおり当センターの各診療科へご相談ください)。



■ 診療内容

救急診療科では、病気・怪我の区別なく、生命の危険な状態にある患者さんに対し、24時間365日いつでも、迅速で的確な診療を行えるよう心掛けています。

特に当センターは、地域の小児医療体制の中で効果的にその役割を果たすため、基本的には直接来院される患者さんの一般救急外来は行っていません。

緊急診療が必要とされる患者さんにつきましては、P.Iにある手順で、医療機関からご連絡ください。なお、急な病気で困りの患者さん及びご家族から直接の場合は、「こども医療でんわ相談」#8000にご相談いただくか、地域の急患センター等を受診するようお願いいたします。

■ 対象疾患

生命の危険な状態にある重篤な救急患者さん

● 外因性救急

外傷、熱傷、急性中毒、溺水、窒息、異物誤飲、刺咬症など

● 内因性救急

急性呼吸不全、喘息重積、敗血症性ショック
心筋炎・心筋症、意識障害、けいれん重積
急性腹症など

● 小児に特有な疾病

BRUE (Brief Resolved Unexplained Events) など

● その他

院外心停止、重篤な身体合併症を有する精神科救急など



初療室

■ 治療方針

重篤な救急患者さんの搬入後、

- ① 救急初療室でABCD (A-気道、B-呼吸、C-循環、D-意識) の評価と安定化のための蘇生処置と病態の把握、治療戦略の決定を行い、
- ② 必要とされる各種検査、外科的処置並びに薬剤投与等を施行し、
- ③ 治療継続のため、小児集中治療室 (PICU)、小児準集中治療室 (HCU) へ速やかかつ安全に移送します。

この間、各診療科による高度な専門的治療が必要となった場合には、院内各専門診療科又は隣接するさいたま赤十字病院高度救命救急センター・救急科の協力を仰ぎ、適切な専門的治療を行います。

また、病院前救護にも力を入れています。さいたま赤十字病院が運用する現場出動型のドクターカーに小児傷病者事案で出動要請が入った場合、当科ER担当医師が同乗し、早期の医療介入を実現しています。

■ スタッフ紹介



科長
小児救命救急センター長
植田 育也



医長
利根澤 慧



医長
濱本 学



医長
岸本 健寛



医長
福島 正大

医長 加藤 隆宏
中野 諭

医員 堀米 顕久
蓮沼 竜司

外傷診療科

当センターホームページ
「外傷診療科」



■ 診療内容

外傷は小児救急診療における中核的疾患群であり、当科では小児特有の解剖・生理学的特徴を踏まえた外傷診療を提供しています。

県内救急隊からの直接搬送、医療機関からの紹介による転院搬送に対応しており、軽症から重症まで幅広い外傷症例を受け入れています。特に重症外傷に対しては、病院前救急医療の段階から関与し、初期対応を含めた一貫した診療体制を構築しています。

来院後は、外傷初期診療ガイドラインに準拠した初療を行い、迅速な身体診察・画像診断のもと、必要に応じて外科的治療や集中治療管理を実施します。急性期管理後は、機能予後及び発達への影響を考慮し、多診療科と連携した包括的な診療へと移行します。

また、外傷診療の枠組みを生かし、中毒、熱傷、異物などの外因性救急疾患にも対応しています。

■ 対象疾患

以下のような外傷・外因性救急疾患に対応しています。

● 外傷全般

頭部外傷、四肢骨折、胸部・腹部外傷、多発外傷

● 外因性救急疾患

切創・挫創、熱傷、異物誤飲・誤嚥、急性中毒、熱中症、低体温症

● 特記事項

重症外傷症例については、関連施設と連携した集学的治療を行っています。

外来では軽症外傷や処置後フォローにも対応しており、地域の小児外傷診療の補完的役割も担っています。

児童虐待が疑われる症例については、院内の小児虐待対応チームと連携し、医学的評価及び社会的対応を行っています。

■ 診療体制・特徴

● 24時間365日の受け入れ体制

救命を要する重症例を含め、24時間365日、外因性救急疾患に幅広く対応しています。

● 多診療科連携による集学的治療

小児外科、整形外科、形成外科、放射線科、脳神経外科等と密接に連携し、重症外傷症例にも対応可能です。

● 小児外傷に特化した診療

年齢・発達段階に応じた評価・治療を行い、鎮静・鎮痛・被曝量低減を含めた侵襲軽減に配慮しています。

● 病院前救急医療への関与

隣接するさいたま赤十字病院高度救命救急センターと連携し、小児症例においては当院医師がドクターカーに同乗し出動します。救急現場からの初期診療に関与しています。

■ 診療実績(2025年度)

2025年度の外因性救急患者の救急車受け入れ件数は約1,200件、2025年度の外因性救急患者の診療件数は約2,500件でした。



小児集中治療室(PICU)



小児準集中治療室(HCU)



救急外来(ER)

■ スタッフ紹介



科長
多田 昌弘

医員 川野邊 有
医員 宮脇 康輔
医員 石津谷 友昭

麻 醉 科

当センターホームページ
「麻酔科」



■ 診療内容

小児の手術は基本的に全身麻酔が必要です。さらに本人の全身状態や先天性疾患の有無などにより、それぞれの症例に応じた麻酔方法(使用する薬剤や気道確保の方法など)が必要となってきます。当科では小児麻酔に精通したスタッフにより子どもたちが安全かつ最低限の不安で手術を受けられるよう、麻酔・全身管理を行っています。

また、昨今のCOVID-19やインフルエンザなどの感染流行により、手術室でも感染疑い患者の取扱いが増加しています。最新のガイドラインに則った感染対策マニュアルを整備するとともに、必要に応じて陰圧手術室を利用するなど感染対策には万全を期しています。

■ 麻酔の実際

手術室に入室後モニターを装着し、マスクから酸素と麻酔ガスを吸って眠っていただきます。(マスクにはフルーツなどの好みの香りをつけられます。また就眠まで音楽や動画を鑑賞できます。)術前に点滴が確保されているお子さんや、年長児で起きている間に点滴確保が可能なお子さんは、点滴より静脈麻酔薬を投与し眠っていただきます。

全身麻酔中の呼吸を助けるために、気管チューブ又は声門上器具を挿入しています。

手術の内容に応じて術後鎮痛目的で鎮痛剤の経静脈投与を行い、加えて末梢神経ブロック・硬膜外麻酔などの区域麻酔を併用することもあります。

手術が終了して病棟に帰った後も、麻酔科医が術後の鎮痛効果・全身状態などを診察します。必要であれば術後集中治療室に入室し、全身管理・疼痛管理を主科や集中治療科と連携を図りながら積極的に行っています。

※全身麻酔予定の患者さんは麻酔科から麻酔に関する説明を行います。内容により順番の前後やお待たせしてしまう場合がございますが、ご理解ご協力いただきますようお願いいたします。

■ 診療実績(2025年度)

総手術件数	4,057例
全身麻酔症例数	3,908例
6歳未満の麻酔	2,055例
心臓血管手術の麻酔	209例
消化管内視鏡検査の麻酔	269例
MRI・CT・放射線治療等の鎮静	198例

■ 対象疾患

小児外科を始めとし、心臓血管外科・整形外科・脳神経外科・泌尿器科・形成外科・眼科・耳鼻咽喉科・皮膚科など各科外科系手術の麻酔管理を行っています。そして、内視鏡や歯科治療など成人ならば全身麻酔の必要がない検査や処置でも小児の場合には全身麻酔を必要とするため、その際の全身麻酔管理も行っています。それらの中には新生児や未熟児の症例も含まれています。

ほかMRIや血管造影、放射線治療などを行う際の鎮静・呼吸管理や、病棟での急変等臨機応変に対応しています。

また2019年より生体肝移植が始まり、さいたま赤十字病院でドナー手術・当センターでレシピエント手術を行っています。それぞれの手術麻酔は各々の施設の麻酔科医が行っていますが、お互いに連携しながら高度医療に対する麻酔を提供しています。

■ 診療体制

当科はスタッフとレジデント合わせて16人ほどで構成されています。日中はもちろん、夜間休日の緊急手術にも対応できるような勤務体制となっています。



手術室のホスピタルアート

■ スタッフ紹介



科長
蔵谷 紀文



医長
古賀 洋安



医長
伊佐田 哲朗



医長
石田 佐知
(留学休職)



医長
大橋 智



医長
駒崎 真矢



医長
藤本 由貴

医長 小嶋 大樹
医長 高田 美沙
医長 坂口 雄一
医長 鴻池 利枝
医員 影山 翔一

放射線科

当センターホームページ
「放射線科」



■ 診療内容

画像診断は人間の視覚領域を拡大して臨床診断に資するために行うものであり、体表面からは見えない肺や骨格を単純X線写真で観察することから始まり、現在のCTでは広範囲を1mm以下の任意方向の詳細な断層像を得られる能力を獲得するに至りました。さらに形態を画像化するだけでなく、全身の代謝やレセプターの分布、血流や尿流の動態、神経伝達路の方向など、微細構造や機能が続々と画像化されるようになり、現代の臨床診断において重要な地位を占めています。

当センターの放射線科は、この画像診断を中心として関連分野の診療を担当しています。現在は常勤放射線診断専門医4人、レジデントの放射線科医1人に加え、非常勤で放射線治療専門医1人、核医学専門医1人で診療に当たっています。

■ 診療実績(2025年度)

単純X線写真	19,284件
ポータブル写真	16,603件
CT	3,437件
MRI	3,362件
核医学検査	702件
超音波検査	7,346件

単純X線写真及びポータブル写真は、実施件数の約30%について読影を行っています。CT、MRI、核医学検査、超音波検査については全件について読影を行っています。

小児の画像診断には、急速に成長・変化していく小児の正常像・破格・病的画像への理解が必要です。教科書やWebでは得られないこれらの知識を日常的に多数の症例を経験することによって会得しその維持に努めています。



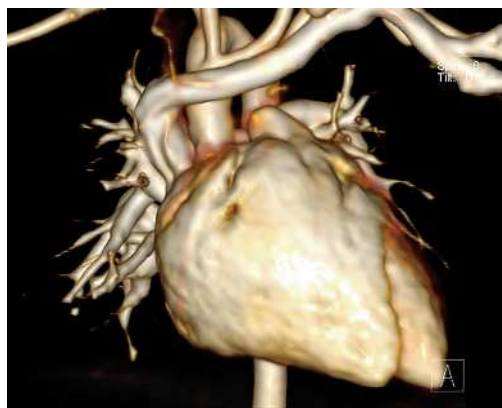
各診療科とのカンファレンスの様子

■ 検査機器

検査機器は下記のとおりです。

128列CT	2台
3.0T、1.5T MRI	各1台
SPECT・CT、SPECT	2台
超音波検査器	3台
透視造影装置	1台
血管造影装置(1台は手術室内)	2台

小児へ最適化した機器のチューニングと、入眠のための個室の整備など周辺環境の整備により、低侵襲で不快さの少ない検査の実現を目指しています。



三次元CT画像

■ スタッフ紹介

科長	田波 稯
医長	小熊 栄二
医長	佐藤 裕美子
非常勤医師	西田 知仁

病理診断科

当センターホームページ
「病理診断科」



■ 診療内容

病理診断科の主たる業務は、組織診断・細胞診断・病理解剖です。いずれも患者さんから採取された細胞・組織について、肉眼的観察、顕微鏡的観察（電子顕微鏡・蛍光顕微鏡を含む）、特殊な染色を行い、最終診断します。さらに、臨床研究部や他施設と共同して、ISH(in situ hybridization)・FISH(fluorescence in situ hybridization)・キメラ遺伝子検査などを行い遺伝子レベルでの異常を検索し診断確定を行っています。

病理診断科は、常勤病理専門医2人、常勤臨床検査技師3人（全員細胞検査士）、外部からの応援医師（病理専門医・週2回程度）の体制で業務を行っています。全症例のダブルチェック、積極的な院外の専門病理医へのコンサルテーションを行い、診断精度の向上を図っています。また、日本小児がん研究グループ病理中央診断への標本提供や、がんゲノム医療連携病院の病理医として、ゲノム医療や遺伝子パネル検査についての説明、国立成育医療研究センターとのエキスパートパネルへの参加も重要な業務となっています。

■ 診療実績(2025年度)

組織診断	1,827件
迅速診断	58件
細胞診断	420件
電子顕微鏡診断	126件
病理解剖	13件(外部2件)
外部からのコンサルテーション	23件
研究依頼業務	97件

組織診断・細胞診断を行う主な対象は、脳腫瘍・神経芽腫・腎芽腫・肝芽腫・リンパ腫・横紋筋肉腫等の小児固形腫瘍（小児がん）及び良性腫瘍性疾患、ヒルシュブルング病・胆道閉鎖症・嚢胞性肺疾患などの臓器・器官の発育形成不全症、さらに、消化器・呼吸器・腎臓（糸球体腎炎等）の炎症性疾患など様々です。また、周産期の異常に伴う胎児・新生児の異常も検索対象となります（主に胎盤検索と病理解剖）。そのほかにも多彩な疾患が含まれ、ほぼ全科の疾患を対象としています。病理解剖では、遺伝子異常を背景とする先天性疾患が比較的多く、遺伝科のgenetic autopsyで得られる結果や、放射線科のautopsy imagingなど病理所見以外にも様々な情報を活用して、死因究明に最大限努めています。

小児科領域での病理診断を必要とする疾患は希少例が多いため、全国の大学病院や大きな総合病院の病理診断科でも症例数が少ないのが現状です。当科では、全国屈指の症例数を保持しており、迅速かつ正確な病理診断を臨床の現場に反映できるよう努めています。

臨床研究部とも連携を図り、がんゲノム医療などの先端医療・検査にも積極的に関与して形態学的な手法のみならず多方面からの疾患へのアプローチにより、より高度かつ精密な医療を目指してまいります。



スタッフ一同



病理医と臨床検査技師と一緒に標本を見て、標本の良悪や診断のポイントを話し合います。

■ スタッフ紹介



科長
渡辺 紀子



医長
市村 香代子

応援医師	村上 仁彦
応援医師	中野 夏子
応援医師	入江 理恵
応援医師	西巻 はるな
副技師長	急式 政志
副技師長	田中 はるな
主 任	本田 聡子

臨床検査科

■ 業務内容

臨床検査科は、直接患者さんを診察・治療する科ではなく、臨床検査技師と協力して迅速で質の高い検査結果を臨床の先生方に提供しながら、必要な検査が適切に行われているかを検討するために開設された科です。

臨床検査とは患者さんから採取した血液や尿、便などを調べる「検体検査」と、心電図や脳波など患者さんを直接調べる「生体検査(生理検査)」のことを指します。自分の体調を十分に説明することが難しいお子さんにとって、客観的な評価が可能な臨床検査は診断・治療を行う上で大変重要です。また、お子さんは成人と違い、多くの量の検体を採取することが困難なので、微量な検体で正確な結果を出すことが必要とされます。多くの臨床検査が検査技術部で行われますが、その運営に問題ないか評価・監視する役目も当科は担っています。

当センターの検査技術部は2019年度に十分な臨床検査を行う能力を有していることを認定するISO 15189を取得しています。これは当センターの検査方法及びその結果が国際基準を満たしていて、信頼性が高く、国際的に通用する検査データであることを示しています。

医療技術は日々進歩しています。臨床検査も同様です。当科では新しい検査法の導入や古い検査の整理などの検討も行います。

■ 実績(2025年度臨床検査件数)

検体検査(件)		生理検査(件)	
尿一般検査	47,865	呼吸循環機能検査等	7,431
血液検査	185,815	超音波検査等	7,528
生化学検査	1,162,118	脳波検査等	3,337
免疫検査	100,351	計	18,296
微生物検査	25,563		
輸血検査	19,581		
染色体・遺伝子検査	649		
外部委託検査	59,702		
計	1,601,644		

マス・スクリーニング受診患者数(人)

先天性代謝異常症	33,355
上記再検査	1,752
拡大マス・スクリーニング	25,040*
上記再検査	72*
計	60,219

※2025年度7月より検査開始



一般検査



細菌検査室



輸血管理室



生化学自動分析機

血液自動分析

■ スタッフ紹介



科長
杉山 正彦
(総合診療科医長 兼任)

臨床研究部

当センターホームページ
「臨床研究部」



■ 業務内容

臨床研究とは、病気の予防・診断・治療方法の改善、さらには病態の解明や患者さんの生活の質の向上を目的として行われる医学研究であり、治験等の臨床試験と観察研究、橋渡し(トランスレーショナル)研究に大別されます。より良い医療を患者さんに届けたいという臨床の視点と、病気の本質に迫ろうとする科学的探究心がこれらの研究の原動力です。多岐にわたる小児疾患の専門医療を担う当センターは、豊富な症例基盤を背景に、多様な臨床研究を創出し得る高いポテンシャルを有しています。臨床研究部は2017年4月に設置され、文部科学省の認定研究機関として、研究倫理及び利益相反管理を始めとする各種規範を遵守しながら、医療現場に根ざした臨床研究を推進してまいりました。2026年度からは、治験管理部門と統合し、「臨床研究・治験センター」として再編され、観察研究に加え、特定臨床研究、医師主導治験、企業治験を含む臨床研究全体を一体的に推進する体制となっております。

臨床研究部には、実験・検体管理を行う臨床研究室、研究計画の立案及び実施支援を行う臨床研究支援室並びに動物実験の管理・教育を担当する実験動物管理室の3部門が設置されています。研究費申請や契約・管理などの研究関連事務については事務局管理部臨床研究管理室が担っています。現在、臨床検査技師、CRC、事務職員が連携し、研究支援及び研究基盤の維持・管理にあたっています。



検体保存に使用する安全キャビネット(左)と
独立した換気装置を備えた染色ブース(右)

■ 実績(2025年度)

- 外部研究費 49件、32,159,740円
- 動物実験 1件(実験動物委員会承認件数)
マウス延べ 27匹
- 標本作製 パラフィンブロック 59個(薄切枚数11,126枚)
免疫組織化学染色 1,989枚
- FISH (fluorescence in situ hybridization) 71件(130枚)
- 検体保存 細胞保存 364件、組織保存 66件
さらに臨床研究部は、がんゲノム医療やがん免疫療法といった先端医療の推進にも積極的に取り組ん

でいます。病理診断科と密接に連携し、小児がんの病理診断に不可欠な特殊免疫染色、FISHによる遺伝子解析を実施し、院内のみならず全国の小児がん診療にも貢献しています。

埼玉県立小児医療センターは、2018年にがんゲノム医療連携病院に指定され、国立成育医療研究センター及び埼玉県立がんセンター(がんゲノム医療拠点病院)と連携し、がんゲノム遺伝子パネル検査を通じた個別化医療を実践しております(2025年度パネル検査実施件数17件)。

臨床研究室では患者さんの同意のもとに研究用検体の適切な保存・管理を行っており、これらの貴重な資源を活用して病態解明や新規治療法の開発を目指しています。

また、P2実験室では、白血病・リンパ腫に対するCAR-T細胞療法に関連する細胞調整を行うなど、先端的医療技術の実装にも貢献しています。



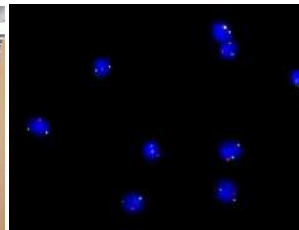
自動免疫染色装置



マウス飼育室



検体保存(骨髄血)



腫瘍細胞の遺伝子解析(FISH)

■ スタッフ紹介



部長
中澤 温子

臨床研究室
副技師長(兼)
急式 政志

臨床検査技師
島村 彩子
高山 満里奈

実験動物管理室
菅沼 栄介(兼)

臨床研究支援室
CRC
伊藤 優子
正木 七津子
内藤 由紀子
木原 尚子

事務職員(兼)
鮎澤 美代子